

2020年度 KOKÔ塾「まなびの郷」

高大地域連携フォーラム 記録集



主催：和歌山大学紀伊半島価値共創基幹 Kii-Plus
和歌山県立粉河高等学校

2020 年度 KOKÔ 塾まなびの郷 高大地域連携フォーラムジョイントフォーラム 記録集

目 次

開催にあたって ご挨拶	兄玉 恵美子（和歌山県立粉河高等学校校長）……………	2
ジョイントフォーラムを終えて	村田 和子（和歌山大学紀伊半島価値共創基幹教授）…	3
KOKÔ 塾「まなびの郷」20 周年を迎えるにあたって	山口 裕市（地域代表世話人・元粉河高校校長）……………	4

【第一部】

1. KOKÔ 塾「まなびの郷」の取り組み

①盆踊り復活プロジェクト	松原 女依（2019 年度まちづくり WG）……………	5
②0 歳～ 100 歳までのつながり	潮崎 遥・西林 美晴（2019 年度福祉 WG）……………	7
③しゃべり場トレイン	水口 俊太（2019 年度教育 WG）……………	8
④地域からのメッセージ	楠 富晴（NPO 紀州粉河まちづくりの会）……………	10

2. 串本古座高校・CGS 部の取り組み

森 陽翔・植田 航平（CGS 部）……………	11
------------------------	----

KOKÔ 塾 OB からのメッセージ	西岡 健（串本古座高校教諭）……………	15
--------------------	---------------------	----

3. 第一部の発表を受けてのコメント

舩越 勝（和歌山大学教育学部教授）……………	18
------------------------	----

【第二部】講演（リモート）

ドイツの高校生企業活動「持続可能な生徒企業」

講師：高雄 綾子

（フェリス女学院大学国際交流学部・准教授）……………	19
----------------------------	----

【第三部】KOKÔ 塾に寄せて

①KOKÔ 塾に関わってきた人の思いを聞く……………	41
②フォーラムに参加して（粉河高校生の感想、参加者の感想）……………	47

参考資料 第 2 回企画運営委員会……………	53
KOKÔ 塾企画委員会申し合わせ……………	56

令和2年度 KOKO 塾「まなびの郷」ジョイントフォーラム 開催にあたって（ご挨拶）

粉河高校校長 児玉 恵美子

本日はお忙しい中、KOKO 塾「まなびの郷」ジョイントフォーラムにご出席頂き誠にありがとうございます。

さて、ご存じの方も多いと思いますが、昨年度は、新型コロナウイルスの影響を受け、予定されていたジョイントフォーラムが実施できない事態となりました。串本古座高校との文字通りのジョイント等新たな取組を含めた盛りだくさんの内容で期待の大きかった分、生徒達、関係者の皆様にとっては大変残念な状況でした。

さらに、今年度も、コロナによる臨時休校等、様々な影響が続く中、本校における KOKO 塾の活動は、自粛せざるを得ない状況になりました。

そこで、和歌山大学、地域の方々との連携のもと、今年度の取組としましては、OBを始め、関係者の皆様の御支援・御協力を頂きながら、昨年度予定していた内容をふまえた上で、このコロナ禍における新たな取組としてオンラインによる KOKO 塾「まなびの郷」高大地域連携ジョイントフォーラム開催の運びとなりました。

1年を経、改めて御準備の上、御発表いただきます串本古座高校の関係者の皆様、誠にありがとうございます。

さらに、フェリス女学院大学国際交流学部の高雄綾子准教授にも予定通り大変興味深いドイツの取組を御講演いただけるということになりました。改めまして感謝申し上げます。

今年度は KOKO 塾、そして、粉河高校生は本日の発表という活動になりましたが、KOKO 塾は来年度 20 年目を迎えます。コロナ禍においては、今後も様々な課題があるかと思いますが、これからも関係者の皆様のお力をお借りしながら、更に進めていきたいと思っていますので、どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、簡単ではございますが、開会の挨拶とさせていただきます。本日はよろしくお願いいたします。

高大地域連携「ジョイントフォーラム」を終えて

村田 和子(和歌山大学 KOKÔ 塾代表世話人)

2020 年度末、私たちは、年間の活動成果報告として位置付けている恒例のジョイントフォーラムを、新型コロナウイルスの感染拡大状況を鑑み「中止」した。

そして、今年、このままでは、KOKÔ 塾を後輩たちにバトンタッチしていくことができないという高校生の願いや、その成果を発表させてあげたい（あげたかった）という先生方の願い等々が、今回の高大地域連携ジョイントフォーラムという事業を生み出す原動力となった。また、KOKÔ 塾が 19 年間の活動の継続の中で生み出している特筆すべきものとして KOKÔ 塾育ちのかつての高校生が、高校教員となって串本古座高校に、粉河高校に登場している。今回のフォーラムでは、私としては、この事実に接していただくとともに、その実像に皆さん方を引き合わせたかったのである。

KOKÔ 塾紀南版をめざす串本古座高校の地域活動クラブの高校生、先生方には直接対面することはかなわなかったが、コロナ禍のなかで培われた大学のオンライン授業、ハイブリッド型事業(対面とオンラインを併用)のノウハウを生かして、フォーラムを実現させ、串本古座高校・地域の方々にも参画いただくことができた。粉河地域では、特産センターに特設会場がつくられ、大学教員は粉河高校で、研究室で、自宅から参加した。また、同じく半島に立地する大学の研究者、OB の参加もあり、関心や取り組みは共通性があることもわかった。

講師の高雄綾子氏(フェリス女学院大学准教授)は、ドイツの ESD の背景を踏まえ、理論的・具体的な実践として高校生企業活動の紹介を通して KOKÔ 塾、CGS 部をつなぎ、ドイツと日本の教育の違い、在り方まで個々が思考をめぐらせる好機をつくってくださった。

身近なまちづくり・環境への「こどもの参画」(1992)を示したロジャー・ハートは、子どもは、大人の操りではない、おとながさせたい活動・取り組みではなく、子どもの自主的・創造的活動へのおとなの参画を説いた。KOKÔ 塾が地域社会にもたらしている影響は明らかにされる必要があるが、私は、その教育的意義は、こうした自分の成長が実感できる生徒たちを生みだしていることであり、生徒たちが「やりたいことだけ」を応援するという高校教員の人たちの意識変革をもたらし、教員の力量形成に寄与していることであると認識している。そこでは、教師と生徒という関係を越えた人間相互発達の関係性が生み出され、構築されている。ここに、教育の本質をみる。

一方で、人口減等の社会変動の中で、20 周年を眼前に控えた KOKÔ 塾では、今後の持続可能な在り方について高校からの提案もあり、深く対話の場をつくりだす一年ともなった。

本報告書は、コロナ禍の中で直面した KOKÔ 塾が、何を生み出そうとしたのかに関わって、その記録をまとめたものである。形としては、高大地域連携フォーラムの採録となるが、20 周年という節目の年を前にした KOKÔ 塾の今を伝えるものであり、今後の発展に活かしていこうとするものである。ぜひ、多くの皆さんにも共有いただければ幸いである。

末尾になるが、この一年の今後に向けた対話に尽くしていただいた企画委員各位、本フォーラムの実現にご尽力いただいた関係者・スタッフの皆さんに心より感謝申し上げる。

KOKÔ 塾「まなびの郷」20周年を迎えるにあたって

地域代表世話人（元粉河高校長）山口 裕市

高校生に「ほんものの学びを」「学びの文化が生きる地域を」という願いからスタートした KOKÔ 塾「まなびの郷」が、もうすぐ 20 周年を迎えます。今回のジョイント・フォーラムは、「高大地域連携ジョイント・フォーラム」と題して開かれ、フェリス女学院大学の高雄綾子先生のご講演、串本古座高校の「地域クラブ」の活動報告があり、加えて、この 1 年間「コロナ禍」のために活動できなかった KOKÔ 塾のために、「粉河の盆踊り」を復活させた 3 年生の活動発表があり、生徒の皆さんには大きな刺激になったことと思います。

高雄先生が紹介してくださった「ドイツの高校生企業活動」は、高校の正規のカリキュラムに位置づけられた活動であり、KOKÔ 塾とは様子が異なりますが、世界に目を向ければ、このように地域と密接につながった教育活動がいかに重視されているかがよく分かります。

串本古座高校の実践は、クラブ活動として行われていますが、地域の課題を掘り下げ、その解決にどのように貢献するかという“ねらい”と進め方がはっきりしている点など、これからの KOKÔ 塾の活動に参考になったことと思います。また、その活動を指導なさった西岡先生は、粉河高校の、それも KOKÔ 塾の卒業生であることは、KOKÔ 塾の活動が他校にまで広がる“良さ”と可能性をもった特別な取り組みであることを感じさせてくれました。

さらに、「粉河の盆踊り」を復活させた 3 年生の発表は、堂々とした立派な発表でしたし、その活動は「地域の伝統文化を復活させる」という大変意義深いものであったと思います。その過程で、粉河商工会はじめ多くの方々から温かい支援をいただけたのは、「地域の文化を大切に守りたい」という熱い思いがあったからでしょう。頑張った皆さんには、誇りをもってこのことを胸にとめ、その誇りを後輩の皆さんに受け継いでいただければと願っています。

ジョイント・フォーラムの終わりに少し触れたことですが、KOKÔ 塾では大学・高校の先生方から助言やヒントをいただき、地域の方々の支援をいただきながら、自分たちでテーマを選び、主体的に計画を立て、学校の枠を超えた活動の中で「学びの楽しさ、面白さ」を味わうことを大切にしてきました。その中で、一つひとつの経験から何を発見し、身につけるかは、あなた次第です。そして、今は何が分かったか、何ができるようになったか説明できなくても、何年か経って、何かの場面で、KOKÔ 塾で経験したことの意味が分かる……そういうものであってもいいのです。でも、活動の中で、何かに気づいたり、感動したり、分かち合えたり、そういう学びが多ければ多いほど、皆さんの高校生活そしてこれからの人生は、きっと彩り豊かなものになるに違いありません。

KOKÔ 塾「まなびの郷」が 20 周年を迎える今、新型コロナウイルスの感染拡大が懸念される中、世界は、「民主主義の危機」と言われ、何が本当か見定めの大変な状況にあります。どうか高校生の皆さんには、KOKÔ 塾の活動を通して生き生きと学び、楽しみながら、そのような困難を乗り越え、誰もが生き生きと学び、生活できる未来の創り手として、その曇りのない眼で世界を見つめてくださることを期待しています。

第一部

1. KOKO 塾「まなびの郷」 の取り組み

① 「盆踊り復活プロジェクト」 まちづくり WG 松原女依

司会（横出/粉河高校）：まずはまちづくり WG の松原女依さん、よろしくお願いします。

松原：みなさんこんにちは。

卒業したので元ですが、まちづくり WG のリーダーをしていました松原です。お願いします。

昨年するはずだった発表を今からします。まちづくりWGは1年間色々な活動をしてきましたが、その中でも一番大きかった、記憶に残った取り組みである盆踊りについてだけ今日は発表させていただきます。

「盆踊りプロジェクト：粉河とんまか復活」の活動について紹介したいと思います。

盆踊りプロジェクトですが、パワーポイントに示されている経過報告のように活動をしていきました。粉河保育所に挨拶しに行って、園児たちとアラレちゃん音頭や「粉河とんまか」を一緒に練習しました。

盆踊りプロジェクト 取り組み経過

2018年5月25日（土）
KOKO塾オリエンテーションにおいて、提案。
委員長を募る（松原女依が立候補し、実行委員長に）。

6月11日（火）粉河保育所に挨拶
6月12日（水）紀の川市役所に挨拶
7月 3日（水）盆踊りプロジェクトの打ち合わせ会議
7月 8日（月）盆踊りプロジェクト 生徒との打ち合わせ
7月 9日（火）粉河保育園に「アラレちゃん音頭」を中心に練習



中国の中学生が粉河高校へ来校していただいたときに、盆踊りで交流会をおこなったのですが、その時も一緒に「粉河とんま

か」を練習しました。

また地域で「粉河とんまか」の歴史や由来を知っている増田さんや松浦さんが来てくれて、教えてもらいながら中国の方と一緒に踊りを練習しました。次の写真は、直前に、本校の視聴覚教室で盆踊りの練習を行った様子です。



いよいよ盆踊りの当日です。私が実行委員長として挨拶して、今日来てくれている稲垣さんと鈴木さんが司会を務めてくれました。

結構人が多く来てくれていますね。

次の写真は、教育WGのしゃべり場を盆踊りの当日におこなったという様子です。テーマは、「地域を活性化するにはどうしたらいいか」という、ちょっと難しめのものだったんですが、熱く議論しました。

盆踊り当日「教育WGのしゃべり場」



私たちまちづくりWGは手作りピザを作ったりして、試作とか大変だったんですが、みんなおいしいと言って食べてくれたので、とてもうれしかったです。

出し物の一つとして、軽音学部の演奏をしてくれました。何バンドか出演し、結構盛り上がりました。夕方から音楽が流れ出し、「粉河とんまか」とか「アラレちゃん音頭」とか色々な曲の盆踊りをはじめていきました。この写真のように、日が暮れるまでずっと踊り続けました。地域の人と粉河高校生と一緒に踊ってくれました。

結構輪になって遅くまで踊り続けました。

盆踊りが終わって、9月5日に踊りプロジェクトの反省会議をしました。反省会議で出た意見なんですが、例えば、「粉河保育所の園児がもっと来てくれたら良かったのにな」という反省が多くて、保育所訪問とか行っただんですが、当日は園児が来てくれなかったのが、初めての盆踊りだから仕方がないんですが、本当だったらもっとと思ったんで、来年こそはと話しましたが、結局コロナでできなくなってしまってとても残念です。

そして、これが、私がその反省会で書いた文章なんですが、最後の方だけ読ませていただきます。

9月 5日 (木)
盆踊りプロジェクト 反省会



「この盆踊りプロジェクト」のおかげで、人前に出ることも、面倒くさいと思いがちなことに積極的に参加することも、何の苦にも思わなくなりました。

この企画を進行した私に感謝してくれる人たちもありますが、私はKOKÔ塾に大感謝です。KOKÔ塾のおかげで成長できた私がやり遂げた初めての大きな行事であるので、KOKÔ塾ありきのことです。自分自身で成長を感じられることができるなんて、普通にすごくないですか？

「もし、来年、私の後ろに続いてリーダーをやってくれる人がいるなら、後悔は絶対にしないと声を大にして言いたいです。絶対に自分のためになるし、絶対に人として成長できるので、ぜひ、ぜひぜひ来年もして欲しいです。来年の夏、期待しています。」というように、来年のことを見据えて書いているんですが、人前に出て何かをするとか、ちょっと苦手だったりしたんですが、それが特に緊張もせず、今も何も原稿を持たず、普通にしゃべれるようになったので、本当に自分が成長できたと思っています。

これから私は、教育学部にすすんで、教師になろうと思っているんですけど、KOKÔ塾の活動で学んだこととかを生かしていけたらと、さらにもっと広められたらと思っ

ているので、これからもがんばりたいと思います。それから大切なことを言い忘れたんですが、提灯は「商工会」さんから、やぐらは「地域のNPO」さんから、電気は地域の「大西電気」さんから、焼きそばとかの屋台を出してくれたのは、地域の「力寿司」さんや「創カフェ」さんが出してくれました。

こんな大きなイベントだったんですが、みんな無償で出してくれたので、本当に助かりました。

それだけでも KOKO 塾ってすごいなと思いました。コロナで色々なイベントがなくなりましたが、もったいないので、どうにかして KOKO 塾を続けていって欲しいなと思っています。私の発表は以上です。

② 「0 歳～100 歳までのつながり」

福祉 WG 潮崎 遥
西林美晴

2019・5 ミーティング
目標決め

**障がい者
高齢者
子ども**

司会：ありがとうございました。それでは続いて福祉WGの発表に移りたいと思います。潮崎さん、西林さんよろしく願いします。

潮崎：福祉WGです。よろしく願いします。

5月のミーティング目標決めでは、障が

い者、高齢者、子どもと関わるという目標を立てました。

この目標にしたのは、今までの0歳から100歳までのつながりといっていたのに、高齢者と障がい者の方々との交流はなかなか持てなかったからです。紀の川市役所の方に協力していただいて、取り組めることがわかり、是非やってみようと思ったからです。

2019年の活動内容

- ・車いす体験
- ・オープンカフェ
- ・老人施設訪問(雅)
- ・七夕まつり
- ・読みかたり
- ・保育園訪問
- ・老人大学
- ・ハンドインハンド(スイーツ作り)
- ・盆踊りプロジェクト



活動内容を発表します。車いす体験、オープンカフェ、老人施設訪問、七夕祭り、読み語り、保育園訪問、老人大学、ハンドインハンド、盆踊りプロジェクトなどの活動を行いました。まず、はじめて車いす体験という活動を行いました。

車いすを紀の川市役所から借りて、乗り方や押し方、スピード、声かけ、段差などのやり方を教えてもらいました。

紀の川市役所の皆さん、ありがとうございました。老人施設訪問では、「雅」（みやび）さんにお邪魔して、質問やカラオケをしたりしました。

続いて老人大学です。灯籠作りを体験させてもらいました。作った灯籠はオープンカフェで飾りました。続いてハンドインハンドのスイーツ作りです。素敵なスイーツを作ることができました。続いて盆踊りプロジェクトです。

私たち福祉班は、ジュース売りを手伝いました。なかには卒業生が子どもを連れて

きてくれたりしました。続いて、読み語り養成講座です。本の持ち方や読む速さなどの工夫を教えてもらいました。一番大切なのは、ハキハキと大きな声で楽しむこと。いちから教えてくださり、ありがとうございました。続いて七夕祭りです。粉河小学校へ行き、紙芝居の読み聞かせをしました。その後、粉河駅周辺で、七夕の飾り付けを行いました。

次に保育園訪問についてです。園児たちは、食べる量も歩くスピードも、わがままも様々で先生のパワーに感心しました。お昼寝の後に、元気いっぱいになる子どもパワーもすごいな～と思いました。



オープンカフェについてです。私たち福祉WGは、炊き込みご飯とフルーツポンチを作りました。両方とも売り切れて良かったです。炊き込みご飯は、こんな大きな炊飯器で炊きました。とても楽しかったです。とても大変でしたが、色々な人と交流できて楽しかったです。

今年は、コロナが広がったために学べたこともあると思っています。

KOKÔ 塾は、たくさんの人との関わりがあったからできることで、もし自分たちだけだとできないので、コロナがあって、あらためて地域の人たちとの関わりがあって、また和歌山大学も協力もしていただいて、改めてその大切さを知ることができま

した。コロナが収まれば、人との出会いや地域との関わりを大切に活動していきたいなと思いました。

司会：ありがとうございました。実は、潮崎さんも西林さんも、長い原稿を用意してくれていたのですが、今日は時間制限があって、カットをお願いしました。しかしすぐに対応してくれて良い発表だったと思います。

③ 「しゃべり場トレイン」

教育WG 水口俊太

司会：それでは最後に教育WGの水口さんをお願いします。



水口：こんにちは。今日発表するのは、KOKÔ 塾教育WGなのですが、教育WGというのは、「しゃべり場」という事前に生徒に話題を決めて、じっくり話し合うという活動をずっとおこなってきました。そして今年で3回目となる「しゃべり場トレイン」にポイントを絞って話していこうと思います。

「しゃべり場トレイン」とは、JR和歌山の方々と一緒におこなうイベントなんですけど、毎年和歌山大学の生徒さんとKOKÔ 塾の教育WGのみんなと一緒にしています。

しかし、今回は他のWGからも協力してもらい、さらに和歌山高校さんも参加してくれて活動しました。テーマは、「和歌山沿線のおすすめを語ろう」でした。和歌

山線は電車を利用する人が少ないので、〇〇駅にはどんなお店があるなどのスポットを紹介するなど、和歌山線のまちおこしについて語り合いました。いつもは、2つのテーマを決めて話すんですが、今回はじっくり話を深めたいということで一つのテーマに絞って話し合いました。和歌山高校の生徒さんたちも参加してくれて、まちづくりWGと福祉WGの本校の生徒たちも参加しました。

そしてこの企画は2回目になるんですが、「よしもと」のワンダーランドさんという和歌山住みます芸人の方も参加していただいて、一緒に司会をしました。

紀の川市役所からも何人か来ていただいて話をしました。急遽、智弁小学校の子どもたちも参加していただいて、僕たちでは知らないスポット、「ここにはこういうものがあるよ」と全然違う視点から色々なことを教えてもらいました。

そして最後の写真がしゃべり場トレインで出た意見になります。高校生から出た意見は、かなり食べ物の話が多かったです。高校生は風景や公園よりもお腹がすいて、ご飯を食べたいという気持ちが勝ってこういう意見が多くなったんですけど、小学生の意見は、根来寺とか、僕たちも知っているんですが出てこなかった意見を言ってくれました。華岡青洲は皆さん知っていると思うんですけど、その近くにある劇をすところとか、ぜんぜん私たちが知らないところを小学生が教えてくれて、そういうところがあるんだと気づかせてくれました。

教育WGの活動を通して、今まではしゃべり場を教育WGだけでやってきたんですけど、人は十人十色で色々な考え方の人がいるというんですけど、同じ環境で育っていくと、どうしても考え方が似てしまって、話題もあまり広がらなかったりするんです

けど、今回は色んな人が参加してくれたので、自分では到底考えられないような内容が出てきて、それが自分の中で大きな力になったと思います。

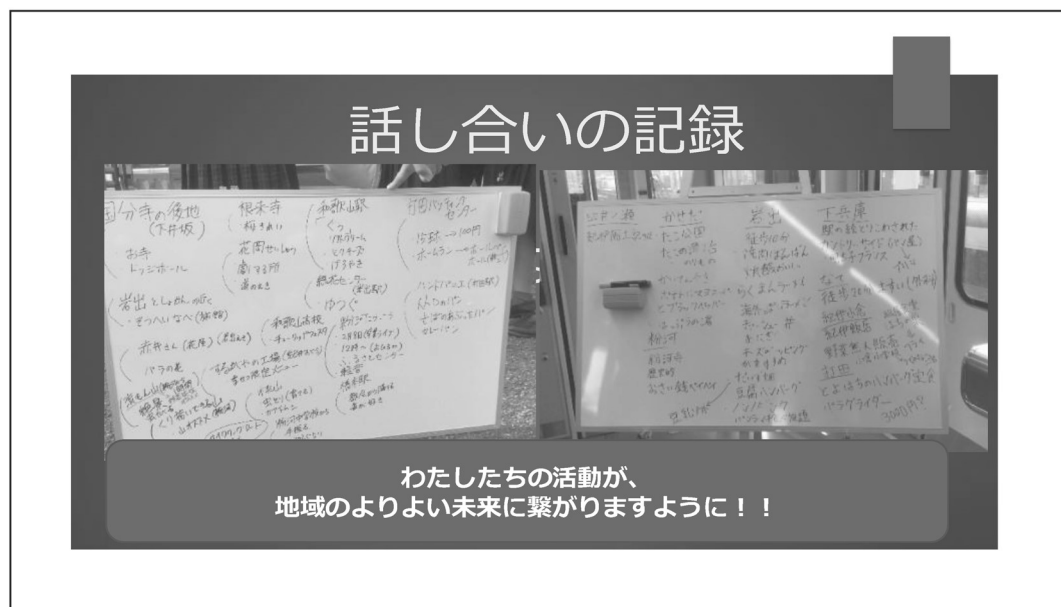
僕たちは教育というまとまりなんで、これは私が教育者になったときに、先生になったときに、一つの意見ではなく、みんなの意見を聞いて、それをまとめるのが先生と僕はそう思っているんで、教育WGではこういうことを学べたと思っています。

僕も大学生になっても、同じような活動をする大学に行くので、この経験を踏まえて、立派な教育者になれたらと思います。後輩へのアドバイスですが、まじめにやっても面白くないので、ちょっとユーモアがあふれるようなね、そういう活動にしてくれたらと思います。以上です。

司会：どうもありがとうございました。みなさんどうでしたか？ 4人の生徒に発表してもらったんですけど、私としたら1年生から知っているので、最初の頃の発表は、原稿を用意して、その原稿を読むだけでもドキドキしながらだったんです。今回の発表はみんな原稿外して、こんなに堂々と発表できるようになったということがね、この成長が KOKÔ 塾の素晴らしさかなと思います。

松原さんは自分では言いませんでしたが、3年生の後半にはビブリオバトルで県大会優勝し、コロナで叶いませんでしたが、全国大会への出場権を得たりと、すばらしい活躍でした。また松原さんも水口さんも教員を志すという話で、私たち教員にとってはとてもうれしい話でした。本当にありがとうございました。もう一度拍手をお願いします。

司会：ありがとうございました。これで粉河高校の発表は以上です。



④ 地域からのメッセージ

とんまか通り商店街で、御商売を営む楠富晴さんからのメッセージ

皆さん、こんにちは。さて今期も早いもので3月に入り、締めジョイントフォーラムを迎える日となりました。

昨年までだれもが予想だにできなかった新型コロナウイルスが世界中に蔓延し、未だ出口がはっきりせず 私たち KOKO 塾の活動においても大きな障害となり、活動も自粛せざるをえない状況下にあります。

コロナ禍の中、ややもするとチームの一人ひとりの距離が離れる事が懸念されるところで、生徒さん達は、モチベーションをたもちながら、繋がりを大切に、創意工夫されながら取り組んでこられたのだと今日の発表を聞かせていただき、大変嬉しく思いました。また、生徒さん達のプレゼンの上手さに改めて KOKO 塾の大きな成果であり、そして生徒さんの大きな財産になった事と思います。

今回のようにリモートを活用し地元に住ながらにして広域に繋がりをもてる事にも感動しました。今日の繋がりを今日で終わらせるのではなく発展的にこれからも持続して行く事を楽しみにしています。

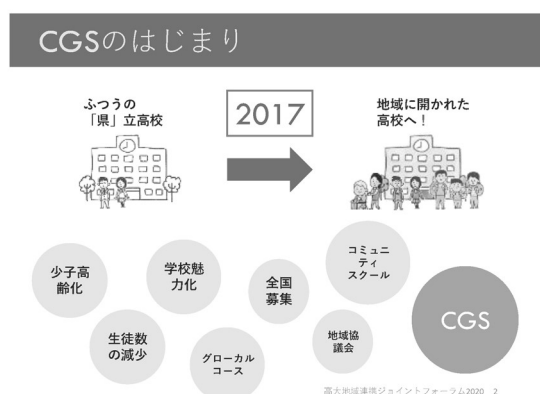
最後になりましたが、準備をいただいた村田先生はじめ高校の先生方に感謝を申し上げます。有難うございました。

(楠さんは、フォーラム当日は、粉河特産センターに設けられたサテライト会場で地域や自治体関係者の方々とともにオンラインで参加されました)

2. 串本古座高校 CGS 部の取り組み

和歌山県立串本古座高等学校の CGS 部の発表を始めます。2 年の森陽翔と、植田航平です。よろしくお願いします。

CGS とは Community General Support（コミュニティ・ジェネラル・サポート）の略で、「地域包括的支援」という意味です。



まず、最初に CGS 部の始まりについて説明します。僕たちの串本古座高校は本州最南端にある高校で、普通の県立高校でした。しかし、2017 年、地域へ開かれた高校へと進化しました。

僕たちの住んでいる串本町は少子高齢化が進行し、僕たちが通う串本古座高校は生徒数が減少しています。それに加えて、多くの中学生が中学校を卒業すると、町外や県外に行ってしまいます。

実際、僕の友人の約半分が町外の高校へと進学していきました。そのため、現在の串本古座高校の生徒数は、1 年 2 年生を合わせてなんと約

150 人ほどです。このままでは生徒数の減少で串本町に学校がなくなってしまうかもしれません。

このような状況の中で、学校を魅力化する必要があり、地域との結びつきを強めるために「グローバルコース」を設置しました。

グローバルコースには特徴的な授業があり、スキューバダイビングの資格が取れる「マリンスポーツ」や二学期間の金曜の午後にインターンシップを行う「串本デュアル」、地元のお寿司屋さんが魚のさばき方を教えてくれたり、近大の先生などから直接指導を受けたり、他には実際に磯釣りが楽しめる「水産生物」という授業があります。

また、他の地域や県外から生徒を募集しています。今も多くの全国募集生串本古座高校で一緒に学んでいます。

さらに、県立学校ですが串本町と古座川町からお金を出してもらい地域協議会を設立し、和歌山県内では唯一の校内塾である「くろしお塾」を放課後に無料で、午後 8 時頃まで開放して勉強に取り組む私たちを応援してくれています。

そして、地域と協力し地域に開かれたコミュニティスクールとしての活動の一貫として、僕たち CGS 部が誕生しました。

CGS 部の活動目的は、地域の活性化に貢献し地域の未来を考えるグローバルな視点を持ったローカルリーダーを育成することです。

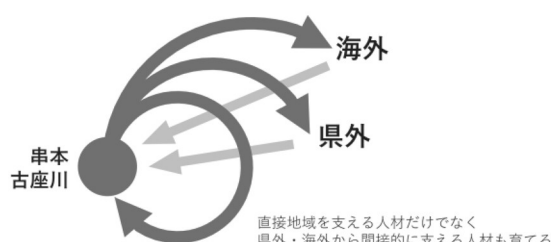
そのために活動していることは、文化祭でバザーを出展したり、地域ボランティアとして色々お手伝いし

たり、生物の研究をしたり、学校避難路の整備をしています。

詳しいことは後ほど説明しますがCGS部の目指すものは、地域を知り、地域に還ることです。

CGSのめざすもの

地域を知り地域に還る



高大地域連携ジョイントフォーラム2020

3

CGSで体験したことを活かして直接地域を支える人材になるだけではなく、県外・海外から間接的に地域を支える人材を育てることを目指しています。

CGS部の取り組みは3つあります。

1つめは、地域を知ろうということです。地域に育っていても、意外と知らないことはたくさんありました。例えば、この地域には天然記念物に指定されている「オカヤドカリ」が生息していることです。このことは私がCGS部に入部するまで知りませんでした。

2つめは、地域と知り合うということです。ありそうでなかった地域の大人との交流です。皆さんはロケット発射場が串本に完成することを知っていましたか？

来年度発射されるロケットを活用してイベントを企画して、観光協会の方たちにプレゼンなどをおこなっ

たことや、地元の方に向けたイベントを企画したりしたことが新鮮であり、地域の大人の方と話をすることは勇気がいるけど楽しい活動です。

そして、3つめは地域を伝えようということです。CGSのそれぞれの班が得意なことで地域の魅力を拡散して、伝えようとしています。

CGS部には4つの班があります。ジオパーク班、プロモーション班、鉄道班、調理班です。それぞれの班が、地域のためにそれぞれ活動しています。



プロモーション班では、ローカルウィキという情報サイトに上げるために地域のお店に取材にいきました。

今後はいろいろな人に串本町を知ってもらいCGSを認知してもらうために、比較的ユーザーの年齢層の若いインスタグラムなども使って広報をしようかなと思っています。

調理班では実際に僕たちで地元の特産品栽培・収穫し、商品開発を行っています。

地域を知ろう

Local Wikiの構築



特産品の栽培



地域特有の生物の研究

高大地域連携ジョイントフォーラム2020 CGS

6

今後は実際に販売できるよう挑戦しています。昨年は古座川町の特産品黒にんにく、4年前には串本町の特産品の南端蜜姫というさつまいもを栽培しました。

ジオパーク班では、近くの浜で生息している天然記念物オカヤドカリを育て研究をしています。

普段は本州最南端の串本町よりも南の温暖な地域で生息しているオカヤドカリの越冬のタイミングや条件を調査することで、環境の変化や地球温暖化について、そして気候変動や環境の変化が紀南地方に生息しているオカヤドカリへどのように影響しているかなどを調べてきました。

また、昨年度は地域と知り合うことを目的に、僕たち CGS 部が独自に企画し、観光協会とコラボし、串本町の道の駅で CGS フェスタを開催しました。

CGS 部の3年目であり、1つの区切りとして、また地域の方に認知してもらうことを目的に開催しました。

CGS 部として、地域の方々と協力し、観光客に串本を知ってもらうジ

オパークガイドや、串本町との結びつきの強いトルコの伝統的なパンのシMITTや飲み物のチャイを販売しました。

ところで皆さんは、古座川町での全国的に有名な特産品を知っていますか？実はゆずなんです。古座川町の平井地区にある活気のあふれた方々（多くはお年寄り）が栽培している古座川ゆずの里の会社取材に行き、実際に仕事体験をさせていただきました。

こんな田舎でも様々な商品を販売している姿を見て、刺激をうけ、僕たちも負けてられないなと感じました。

他にも地域のこども園や保育園にボランティアに行き、地元の子供達と交流をしています。

地域と知り会おう

地域の取材



地域イベントへの参加



ボランティア活動

高大地域連携ジョイントフォーラム2020 CGS

7

地域を伝えようという活動では、プロモーション班で観光甲子園に地元の動画を制作し、それを用いて応募しました。ドローンを使い上空からの撮影も行いました。

地域を伝えよう

インターネットでの発信



研究発表



イベントへの参加

高大地域連携ジョイントフォーラム2020 CGS

8

調理班では地元の食材を使って料理を作成しイベントなどで販売を行い、様々なレシピを開発し食材の新たな可能性を見出しています、今はジオパーク班と連携しフナムシの商用化を目指しています。

最近までは、オカヤドカリを県から許可を取り生態の研究を行い大阪で発表し賞を受賞しました。

最後に CGS 部の課題とこれからについて説明します。

私自身、創設の3年目から入りました。その年は、CGS フェスタを実施したり、文化祭でバザーを出店したり活動も充実していましたが、4年目の今年は、新型コロナウイルス感染症のため、あまり活動が出来ませんでした。

しかし、調理班では地元の食材を使ってトルティーヤを作って、フォトコンテストに応募等をしたり、出来る範囲で活動を継続させてきました。

CGS 部の活動を振り返ると、これまでは模索の4年間だったと言えます。いままではいろいろな分野に手を出してきましたが、すべての班が一体となって活動することが必要だと思いました。

個人の考えですが、ジオ班でフナ

ムシを飼育し、調理班でそれを使った料理を研究・開発・そして商品化し、プロモーション班でPR活動を行ったら面白いのではないかと考えています。

2つ目は、地域のニーズにあった活動です。CGS 部では、いままで高校生のやりたいことを優先しており、あまり、地域のニーズを考えられていませんでした。そこで、これからは、地域のニーズを深掘りして、双方の意見を尊重して地域のお店などと協力して活動していきたいと思いました。

例えばロケットのイベントの時、商店街のお店の方々と、商品開発を行い、その商品を販売してみようと考えています。

3つ目は、高校生の自主性です。これまでは先生の意見を聞いてみてやってみようと考えていましたが、これからは、自分たちが発案し行動していくことが大事であると考えます。これからは自分たちで考え、先生に発案し、行動に移していきたいと考えています。これで CGS 部の発表を終わります。ありがとうございました。

CGSの課題とこれから

□ 模索の4年間

4年間、様々な活動に手を出してきたが、そろそろ軸が必要？

□ ニーズに合った活動

高校生の「やりたい」と地域の「やりたい」の一致

□ 高校生の自主性

高校生が主役となってやりたいことを実現するのが理想

高大地域連携ジョイントフォーラム2020 CGS

9

KOKÔ 塾の経験を生かす KOKÔ 塾 OB からのメッセージ

西岡 健（串本古座高校・教諭）

初めまして、串本古座高校で教員をしています西岡といいます。僕は今 26 歳でちょうど 8 年前に粉河高校を卒業しました。僕も当時は KOKÔ 塾の一人として、情報ワーキンググループ(以降、WG)で活動をしていました。

今日は高校卒業から、特にすごいことをやってきたということではないのですが、振り返りつつ、お話ししたいと思います。

僕は、高校時代は情報 WG に所属していました。今日はその発表がなかったのですが、少し寂しいという気持ちもあります。こういう活動をしていたのかということで、懐かしいのですが、2012 年、加藤先生が書いてくださっていた KOKÔ 塾通信を振り返ってみます。(写真右が、高校生の西岡さん)



リーダーの西岡くんによる指導の様子。テキパキと後輩たちに指示していました。クラスに一人は必要な人材です。

「KOKÔ 塾通信 No. 5」2012 年

これは今も行っていると思います。

私が所属していた情報 WG では、いい意味で適当にやらせてもらえたグループだったと思います。どういうことをしてたのかというと、大学に行って豊田充崇先生にお世話になりながら、動画編集の技術などを教えていただきました。



ここに僕が高校三年生の時の写真が載っていますが、リーダーとして後輩に指示をテキパキと指示をしているなどと褒めていただいていたりで、ありがたいと思っています。

今年度はコロナウイルス感染症のためにオープンカフェも出来ていないと思いますが、オープンカフェで情報 WG はなぜか毎度、綿あめを作ることになっていました(笑)。ただ、地域の方とふれあう大事な場ということで、必ず参加させてもらっていました。

私自身、当時の KOKÔ 塾に参加させてもらった理由は、自分からではなく誘われたからです。しかし、もともと人前で発表し

たりするのが好きな方だったので、そのような活動が出来たり、ITにも興味があり、しかも部活動ではないということで自由に活動出来るというのが、当時の僕にとってでは魅力に感じ、その後は積極的に参加したのだと思います。

今の高校生にはイメージできないかもしれませんが、当時はスマホもなかったですし YOUTUBER もいなかったのも、そういうところを僕たちはやろうとしており、僕たちは最新のことをしていたのかなあと、思います。でも結果で何かあらわすということはありませんでしたが、好きなことが出来たと思っています。

そのなかで、KOKÔ 塾では地域と関わることがやっぱり多かったと思います。私自身は「地域を盛り上げていったらいいな」という感じの気持ちで活動していたというより、今振り返ってみると、「自分の好きなことが出来て、それが結果的に地域を応援することにつながっていったら非常にいいのではないか」という気持ちで取り組んでいたと思います。

そういうことをやりながら、粉河高校での KOKÔ 塾を取り組みました

その後大学生になり、私は東京の私立の教育学部に進みました。

私がなぜ教育学部に行ったのか、教員になろうと思ったのかというと、当時僕の地理の担当してくださった先生の授業が一番面白かった楽しかったという気持ちがずっとあり、その気持ちが僕を教員に向かわせてくれたと思います。

今、教員として授業をしていて、そんなに簡単にうまくいかないのも、余計にその先生のすごさを感じています。

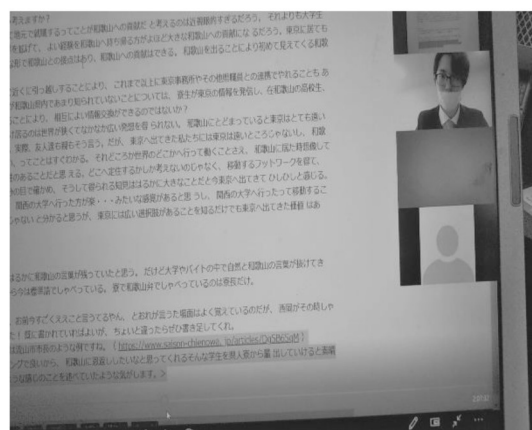
そして、大学にいて、地元を応援するとか、地域を応援するという活動をしてたのかというと、全然していませんでした。ですから先ほどの高校生の発表で、教育学

部に行ってこういうことをしてみたいとか、教育者の視点で地域を応援したいということを知って、すごいポジティブで、そのような子どもたちを育てていて KOKÔ 塾のすごさを改めて感じますし、僕の高校時代とは全然違うことを、発表してくれた高校生を本当に尊敬します。

大学生の頃は、春休みや夏休みなどに、僕は自転車に荷物を乗せて九州一周とか北海道一周とかに行っていました。そのときに、KOKÔ 塾で活動して良かったと感じたことがありました。それは、旅先で大人の人に僕自身から声をかけて交流することが出来るようになっていたことでした。それは、KOKÔ 塾の時に地元の人という、学校関係者以外の大人の方とふれあったり、話し合ってきたという経験が生かされていると今考えてみると思いますし、その話しかけるという経験が僕にとって、苦ではなくなったというのが KOKÔ 塾で得たことであると思います。

ただ、和歌山のことを全く考えてなかったということではありません。

僕自身は和歌山から東京に行き、調布市にある和歌山県人寮に住んでいました。そこには、紀北・紀中・紀南といういろんな地方から東京の大学に進学してくる学生がいて、その中で寮長さんも混じって、和歌山への貢献についてどう考えるかについて話し合いをしたことがありました。



そこで、大学を卒業してすぐ地元に戻って就職することだけが和歌山への貢献と考えるのは近い将来（未来）しか見ていないのではという話にもなりました。

和歌山にいらなくても、和歌山に貢献できるのではないかという話しあいになったことは今でも覚えています。

私は、和歌山にすることだけでは世界が狭いと思っています。東京は一見遠いように思えますが、実際いってみると近くにあると感じられます。

和歌山の、例えば串本から粉河に移動する時は時間的に考えれば、東京に行く方が飛行機で1時間ですので近いとも言えます。それどころか世界のどこかへ行って働くことさえ、和歌山に居た時想像していたよりもずっと可能性のあることだと思えるんです。

どこへ定住するかしか考えないのじゃなく、移動するフットワークを得て、移動することにより自分の目で確かめ、そして得られる知見ははるかに大きなことだと東京へ出たことでひしひしと感じました。

この中で、関西の大学に進学しようと考えている人もいますが、やっぱり日本の中心である東京に行くことで自分の選択肢が広がり、経験値が高まるという思いもあります。

そして、先ほどの県人寮での話し合いに戻るのですが、「人生のどこかのタイミングでいいので、和歌山に恩返しできたらいいのではないかな？そういう人を県人寮で育てていきたい、輩出していきたい」という思い、そういう貢献もあるということを話し合いました。

KOKÔ 塾でも同じような思いがありながら活動されていると思いますし、KOKÔ 塾で学びながら地元で貢献するという経験ができたからこそ、東京に行ったり県外に

行って学んでいく中でも、和歌山にも恩返しするという考えになれるのかなと思います。

このような考えで、私は今、串本に来て4年目になります。KOKÔ 塾と似ているような地域を応援する CGS 部の顧問をさせてもらってます。

今はまだ、KOKÔ 塾を見習って、まねしながら進んでいっているところが大きいのですが、いずれは KOKÔ 塾を追い越していけるような力のある部活にしていきたいと思っています。

この先も KOKÔ 塾と CGS 部が交流できるような機会が増やせていければ嬉しいと思っています。これからどうかよろしくお願いします。

所属は、2021 年 3 月末現在

Community General Support

Kushimoto-koza, WAKAYAMA

県大和県民交流ジョイントフォーラム
2020



3. 第一部の発表を受けてのコメント

船越 勝（和歌山大学教育学部・教授）

時間がないので、3 点に絞ってお話ししたいと思います。

子どもの育ちには2つの教育機能がかかわっていると言われていました。

一つ目は、意図的な営みとしての「教育」(education)、もうひとつは、非意図的に行われるもの、これは「形成」(forming) といいます。具体的には地域や社会で子どもを育てるような側面をいうのです。

今、地域の教育力ってずっと失われつつあると言われていていますよね。そういうふうに見てみると KOKÔ 塾でやっていることというのは、こうした「形成」につながっていくような地域の教育力、例えば、盆踊りを復活させるといったことですが、それは「形成」の力を回復させていたり、「形成」の力を取り戻していたりする営みであると思います。だから、最初に松原さんが「やっているうちに知らず知らずのうちに私は成長していました」と言っていましたね。これは「形成」の力を KOKÔ 塾が取り戻しながら、またその「形成」の力で無意識のうちに育てられたといえると思うのです。

二つ目は、地域と学校の関係です。高校が元々無条件にあって、そのまわりに地域があるということではなくて、地域があって高校がある。例えば、東日本大震災の経験に学べば、地域の復興がなされないと学校再建はあり得ない。地域があってはじめて学校がある。だから、粉河の地域でも、「とんまか通り」の商店街がしんどくなって、どうにかしたいということが地域側のニーズとしてあったとしたら、粉河高校もそうした地域の課題に主体的にかかわって初めて高校として存立し得るんじゃないかなと思うのです。粉河高校もそうだと思うし、串本古座高校も生徒総数が 150 人ということですから、そうです。このような地域が元気になって、人と人がつながり、そのなかで人が育っていくような教育、これが地域発展学習と言われたり、サービス・ラーニングと言われたりしますが、そういうことをやりながら、地域も学校も元気になれる営みやすじみちを考えてきたというのが KOKÔ 塾じゃないかと思います。

三つ目には、新しいものをつくり出すのは、これはよく言われますけれども、「若者・ばか者・よそ者」と言われます。KOKÔ 塾の中心は高校生じゃないですか。ですから、若者が関わっているんだと思うんですね。それから「ばか者」。教育 WG の報告のなかで、「真面目にやっていたら、おもしろくない」って言っていましたよね。言葉を変えていえば、「常識」にとらわれない、「正しい」とされるものに逆らってやっているんだと言ってくださったんだと思います。だから、KOKÔ 塾は、「常識」にとらわれない「ばか者」がつくり出してきた。

そして、私たち和歌山大学のスタッフは、まさに「よそ者」です。

だから、「若者」、「ばか者」、「よそ者」のコラボレーションで生み出してきたのが、KOKÔ 塾なんです。

【第二部 講演（リモート）】

ドイツの高校生
企業活動
「持続可能な
生徒企業」

若者の学びを行動につな
げる教育を考える



講師 高雄綾子氏プロフィール
（フェリス女学院大学准教授）

東京大学教育学研究科修士課程修了。
専門は、「ドイツの持続可能な開発のため
の教育」。主著書・論文、「ドイツにお
ける環境 NP0 と地域社会の相互的発
展構造」（『NP0 と社会教育』東洋館出
版社、2007 年）、「ドイツ脱発への市民
学習：リスク認識から地域再生へ」（『地
域学習の創造』東京大学出版会、2015
年）など。

図 1. 高雄綾子氏提供

0.自己紹介

横浜からこんにちは。今日はぜひ和歌山にお伺いして皆さんのお顔を拝見しながら、直接の反応を頂きたかったのですが、このような事態になってしまいとても残念です。リモートでも皆さんに届くお話ができればと思っています。でも発表を聞いていると、本当に皆さんプレゼンが上手で、活動を通じて成長されたことが如実に分かる前半でした。これに比べて私の発表が下手くそでも許してください。

私はドイツの環境教育や持続可能な開発のための教育を研究していて、主に地域づくりでや、成人の教育と関わるものを見てきました。もちろんその中に学校もあり、そこで日本とは違う文脈で、生徒の企業活動が熱い視線を浴びているというのを面白いなと思って見てきました。学びが行動につながることでどのように社会を変えていくのか、それがドイツと日本でどのように違っているのかについて、皆さんからぜひご意見頂けたらと思います。

1. 環境問題への意識、行動、結果

2018 年から世界中で高校生が行っている「気候のための学校ストライキ」が、2019 年 9 月 20 日にグローバルに行われました。東京の参加者は 2800 人で、ドイツのベルリンは 27 万人という桁違いの参加者数です。東京が特に少なかったとも言えますが、世界中の若者たちが活躍している活動の中で、ドイツが一番多かったんです。ということはドイツの若者って、すごく環境問題に対して熱心だと思いますよね。では、「環境問題に対して実際に行動していると思うのは、日本人とドイツ人のどちらだと思いますか」。この Zoom の画面の

- 19 -

右下に、ハートマークとクラッカーマークの反応ボタンがありますが、日本人だと思う人はハートマーク、ドイツ人はクラッカーマークでお答えいただけますでしょうか。先生方もぜひお願いします。ぱっと見た感じクラッカーが多い感じで、ドイツに分配が上がったかなと思います。では実際に環境保護のデータではどうなのか、見ていきたいと思います。

環境行動の比較	日本	ドイツ
環境問題についての心配度	3.85%	同じ 3.67%
環境問題の解決方法に関する知識の程度	2.58%	同じ 2.81%
環境保護団体に所属しているという人の割合	1.6%	3倍 5.7%
過去5年間に環境保護団体に寄付したことがあるという人の割合	6.1%	2.5倍 15.3%
過去5年間に環境問題に関する請願書や要望書に署名したことがある人の割合	10.6%	2倍 22.4%
過去5年間に環境問題で抗議集会やデモに参加したことがある人の割合	1.4%	3倍 4.3%

明治大学国際日本学部 鈴木研究室「国際日本データランキング」
<http://dataranking.com/index.cgi?RG=3&CO=Japan&CO2=Germany&RO=&GE=ee&FI=&LG=j>

図 2. 環境行動の日独比較 明治大学国際日本学部 鈴木研究室「国際日本データランキ (ISSP) <http://dataranking.com/index.cgi?RG=3&CO=Japan&CO2=Germany&RO=&GE=ee&FI=&LG=j>

まず環境行動を比較した明治大学のデータを見ると、環境問題についての心配度を日本とドイツで比較したものは大体同じくらいです。

知識をどれくらい持っていますかという質問でもだいたい同じですね。で、ここからが変わってくるのですが、環境問題団体に所属しているという人の割合が、日本が 1.6% に比べてドイツが 5.7% で約 3 倍。

環境保護団体の署名に参加したことがある人がドイツは日本の 2 倍、デモや集会に参加したことがあるという質問も約 3 倍ということです。つまり、環境問題について心配したり、知識をどれくらい持っているかについては、日本とドイツは同じですが、環境保護団体に所属したり、寄付や署名したことがあって、デモに参加したことがある人は、ドイツの方が日本より 2 倍から 3 倍多く、確かにドイツ人は環境行動に積極的だということがわかると思います。

ここでクイズです。次の 3 つの環境負荷のうち、ドイツの方が日本よりも「少ない」のは

どれだと思いますか？①世帯当たりエネルギー消費量、②一人当たりの CO2 排出量、③一人当たりのプラゴミ量、さあ、見てみましょう。

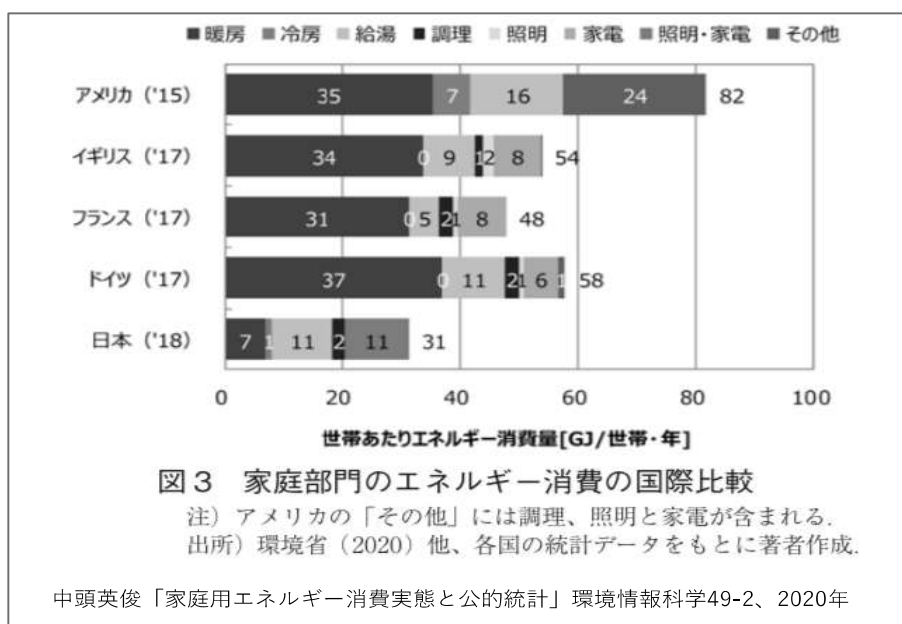


図3. 中頭英俊「家庭用エネルギー消費実態と公的統計」環境情報科学 49-2、2020 年

エネルギー消費量は、ドイツの方が日本より多いですね(図3家庭部門のエネルギー消費の国際比較)。日本は31 ギガジュールで、ドイツは58、日本はドイツの約半分です。エネルギー消費量に関しては、ドイツ人よりも日本人の方が環境にやさしいということがいえそうですね。次に、CO2 排出量を見てみましょう。

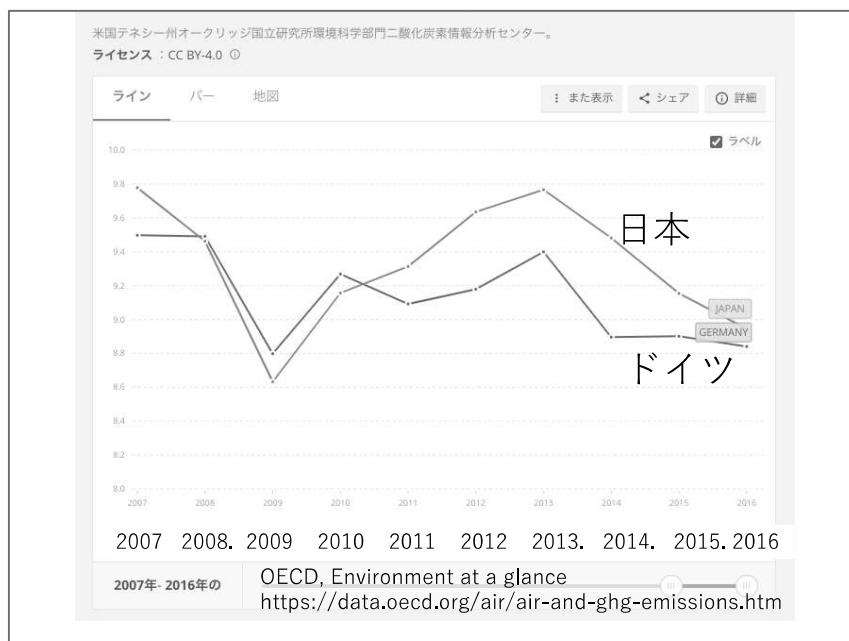


図4. OECD, Environment at a glance <https://data.oecd.org/air/air-and-ghg-emissions.htm>

これは 2007 年から 2016 年の動きですが、上が日本、下がドイツで、ドイツの方が日本より若干少ないけど、あまり変わらないと言えます。ドイツの方が少ないけれども、日本も、2013 年のピーク以降、頑張って下げてきていることがわかります。

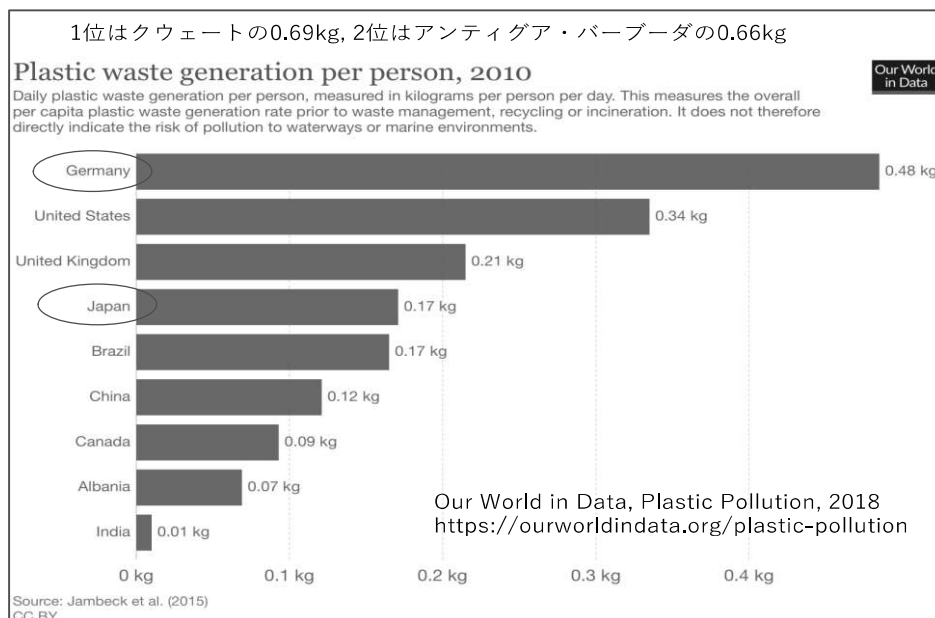


図 5. Our World in Data, Plastic Pollution, 2018

<https://ourworldindata.org/plastic-pollution>

そして、プラゴミ量。これは関連する国だけピックアップした図なので、(図：一人あたりプラスチックゴミ排出量)、1位のクウェート、2位のアンティグア・バーブーダという国は除外されています。これを見ますとドイツは一人当たりのプラゴミ量が非常に多く、日本の三倍ほどです。ドイツに続いて、アメリカ、イギリスも多いですね。日本はプラゴミ量の少なさに関しては優秀だといえます。

先ほどの「ドイツの方が日本よりも少ない環境負荷」のクイズの正解は、1人あたり CO2 排出量だけ、それもあまり差がない、ということになります。

ここから何が言えるかというと、ドイツ人は意識が高くて行動もしているけれども、結果は伴っていないんじゃないか、ということです。日本人とドイツ人は知識と心配の程度は同じくらいなのですが、ドイツではプラゴミ量やエネルギー消費量が多い。

ドイツでは、デモなどで環境保護対策を訴える運動は起こりやすく、27 万人もの高校生がデモに参加しているけれども、全体の環境保護がうまくいっているわけではない。日本は逆に、全体の環境保護はうまくいっているのですが、若者・高校生たちが社会に訴えるといった行動に移していないから、社会から見えづらい。それは悪いことというわけではないのですが、もったいないですよ。ドイツでは、環境保護運動に積極的に参加する人としていない人がいる、全員が環境保護に意識が高いわけではない。そのような人々の行動の違いを生むものは何か、ドイツの社会と教育にヒントがあるのではないかと考えられます。

2. ドイツの多様で KY な教育

それでは、ドイツの社会で行われている教育について見ていきましょう。ここでは二つのポイントに絞って教育の話をします。一つは多様性。もう一つは、KY（空気を読まない）です。

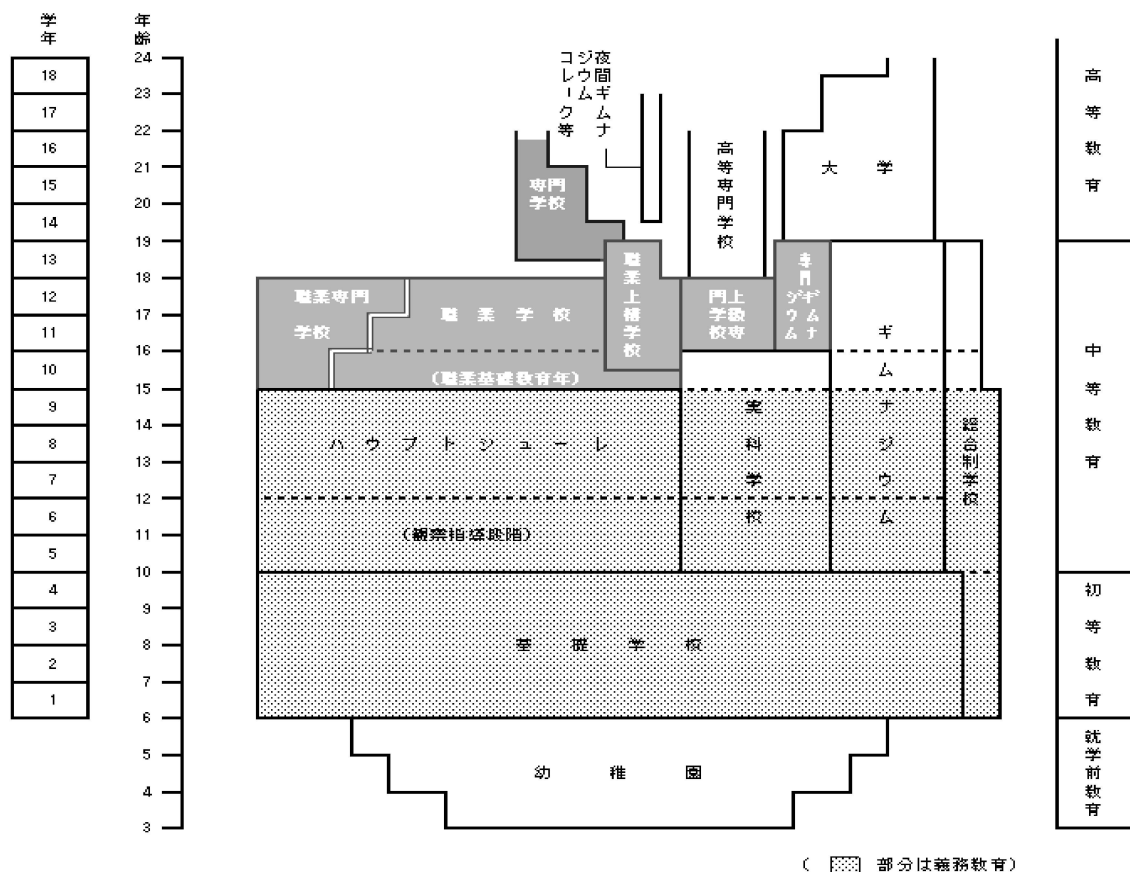


図 6. ドイツの学校系統図 文部科学省 HP 引用

1

これはドイツの教育制度です。一つ目が大学に行く進学コースで、ギムナジウムと呼ばれる中高一貫校。これが日本の大学進学コースに当たります。二つ目が工業系の職業訓練学校、三つ目が商業系の職人訓練学校です。工業系も商業系も職人や専門職になるのが前提なので、大学に行かなくても、職業教育を受けるための高校卒業資格が取れる、そこからスペシャリストになっていきます。

¹ ・ギムナジウム…大学進学者向け高校

・ハウプトシューレ…15 歳から職人として就業する人向け

・レアルシューレ（実科学校）…16 歳から事務職など企業で就業する人向け

そして現在、これらを統合した統合学校も増えてきています。「生徒企業」が行われている学校の7割が、工業系の職業訓練学校と、統合学校の2コースで占められています。これらの学校は学力が低いことが非常に問題になっています。

どうしても現在の先進国では高学歴の人たちが高い所得を得られる職に就くのが当然になっているので、これらの学校も、学力が低い、もしくは学力差が大きいため、子どもたちの学びのモチベーションが保てないということがすごく問題になっています。

ドイツの場合、このようにコースが多様なので、親の姿勢が教育に大きく影響します。親が大卒の場合、子ども100人のうち71人が大学に行くのに対し、親が大卒でない場合は24人しか行かない。家庭でどれだけ子どもの教育に時間とお金をかけることによって進路が変わります。学校でそもそも部活や生活指導を行わないので、進路に学校が関わる割合はすごく少なく、家庭の数だけバリエーションのある子どもができわけです。

多様性、多様なコースというのは、平等な教育を実現しない、これがドイツの教育の一つの特徴です。

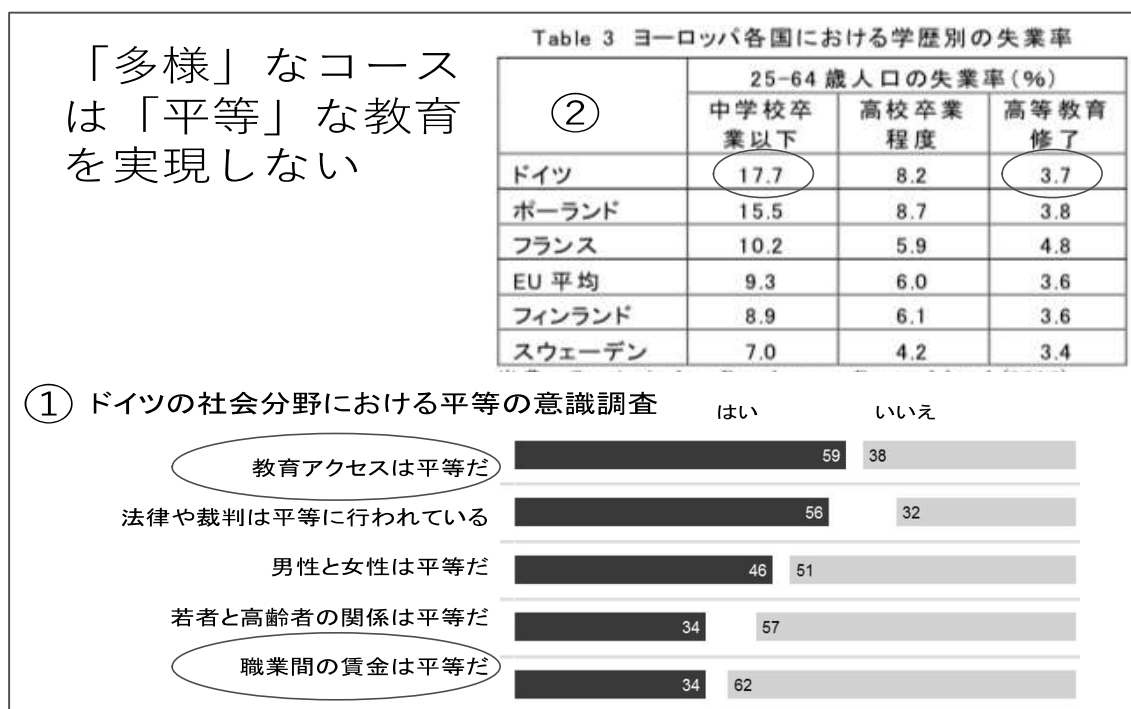


図 7. ドイツ連邦教育研究省「ドイツの学生の経済的、社会的状況」2009年、
https://www.studentenwerke.de/sites/default/files/19_Soz_Kurzfassung19SE.pdf

① の図でドイツの社会分野における平等の意識調査を見ると、「教育アクセスは平等だ」と考える人は6割に上りますが、「職業間の賃金は平等だ」と考える人は34%に減ります。つまり、教育はだれもが受けることができているはずですが、その結果としての賃金は平等ではない。これは、日本のようにみんなが大学に行けるような社会と違って、格差が広がりやすいことを示しています。

②の表は中卒か高卒か大卒かによる失業率の違いを表しています。ドイツは全体的には低

い失業率を誇っている国ですが、中卒以下を見ると、EU 平均よりもずっと高くなってしまっています。平等な教育というものが、多様性の中では実現しにくく、その結果格差が広がることが現れています。

それでは、大学に行く子どもたちはどういう教育を受けているのでしょうか？「ギムナジウム」という進学コースの子どもたちは、自己主張や自己プレゼン能力など、空気を読まずに自分の意見を発現するような能力を身に着けていきます。選ばれた人が社会の中核を担うリーダーシップ教育です。発言しないのは欠席と同じとみなされ、議論することで民主主義実現の主体となることを目指しているのです。また、小学校は4年生までで、10歳で進路を決めなければいけないので、もう将来の職業を具体的にイメージをした子どもたちが来ています。職業のためのインターシップを、高校卒業後、大学入学前にギャップ・イヤーという形で行う高校生もすごく多く、将来の職業のイメージがはっきりしている。

KY 教育でものすごく自己主張できるプレゼン能力の高いリーダーシップをもった子たちが、目的を持って大学に行くための授業、教育になっています。実はドイツには大学入試が無く、その代わりに「アビトゥア」という高校修了資格で大学に入学できるかが決まります。

アビトゥアが高校の学びの集大成と言えるので、その内容を見てみましょう。

全体的に暗記ではなく、自分の意見を論理的に主張できるかどうかが問われます。

どんな問題が出されるかというと、筆記試験と口頭試験に分かれていて、筆記試験は一日一科目、数時間かけて論文を書きます。英語でも穴埋めや選択式ではなく、英語で論述させる試験になります。それを全科目で一週間から10日ほどかけて行います。そのあとの口頭試験では、科目ごとに出される課題について、プレゼンと質疑応答を高校の先生に行います。例えば歴史で「なぜ世界中でテロが起きるのか」という課題が出された場合、中東やアメリカの歴史と組み合わせ、自分の意見をプレゼンします。どの国、どの時代を選ぶのかなどは全部本人に任されて、論理的な根拠を持ったプレゼンをするという試験です。

ここまで、多様性による学歴格差と、高学歴の子どもたちの自己主張能力という、二つのポイントに絞ってドイツの教育を見てきました。

最初に見た、気候変動ストライキに参加するのは、ほとんどが、ギムナジウムに進むようなプレゼン能力、自己主張能力が高い子どもたちなので、あのように全く躊躇なく路上に出てデモができる。ただ、環境保護運動がそれで盛り上がったとしても、すべての人が参加できるわけではないことが、プラゴミやエネルギー消費量を見るとわかると思います。

つまり、一部の優秀な人の自己主張だけで社会全体を変えていくことはできないのです。すべての人が主体的に社会に参加し、自分たちはこのような能力で、このような活動をしていき、社会に貢献していくんだと実感できる教育にならないと、やはり、持続可能な社会というのは実現しない。だから、学歴だけに偏った学習、教育というのはもう限界にきていて、新しい能力、「コンピテンシー」が求められています。この課題に挑戦するのがESDです。

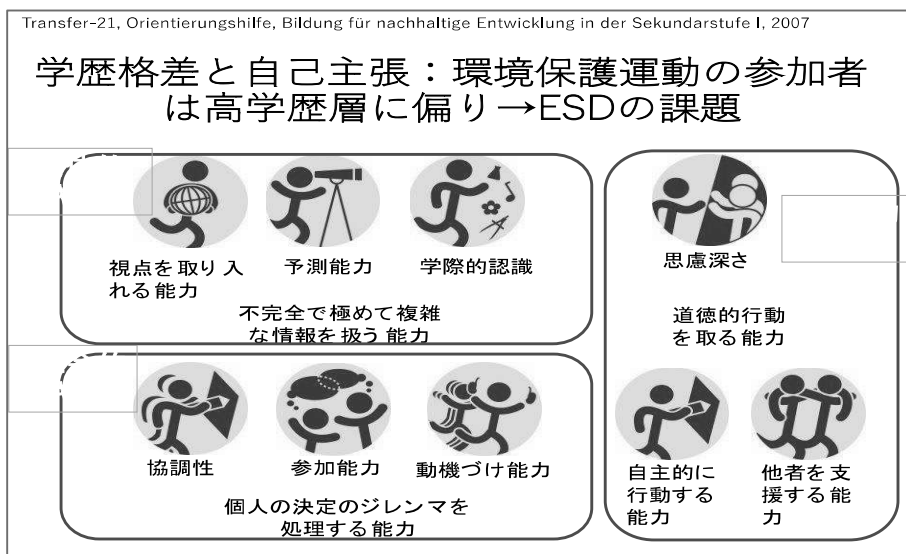


図 8. 近藤孝弘、「ショック療法の功罪～ドイツにおける低学力問題をめぐる評価の政治～」教育テスト研究センターCRET シンポジウム 2010. 12 報告書

3. ESD コンピテンシーとユネスコ学習権宣言

ESD コンピテンシーとは、具体的スキル、社会的スキル、自律的な行動の3つの分野の能力ですが、これを高学歴層だけでなく、全ての人が身につけるべきと ESD は提起しています。

ここでまた質問です。ドイツのような「能力に応じた多様な教育」をどう思いますか？「①面白そう、チャレンジしたい！」、「②厳しそう…無理ゲー」で答えてみてください。面白そうという生徒さんが多いですね。これは KOKO 塾や CGS で活動が続けている皆さんの成果なんじゃないかと思います。これを私が大学などで聞くと、発言することがすごく苦手なので「厳しそう…」と答えるがすごく多いです。ありがとうございます。

ESD は 2005 年から 2014 年にかけてユネスコが主導して行った国際教育プロジェクトで、Education for Sustainable Development、つまり「持続可能な開発のための教育」の略称です。文科省の説明によると「一人一人が自分にできることを考え、実践していくこと。」とあり、そして think globally, act locally とあるので、世界の問題に対して提起されている学習活動だと言えます。

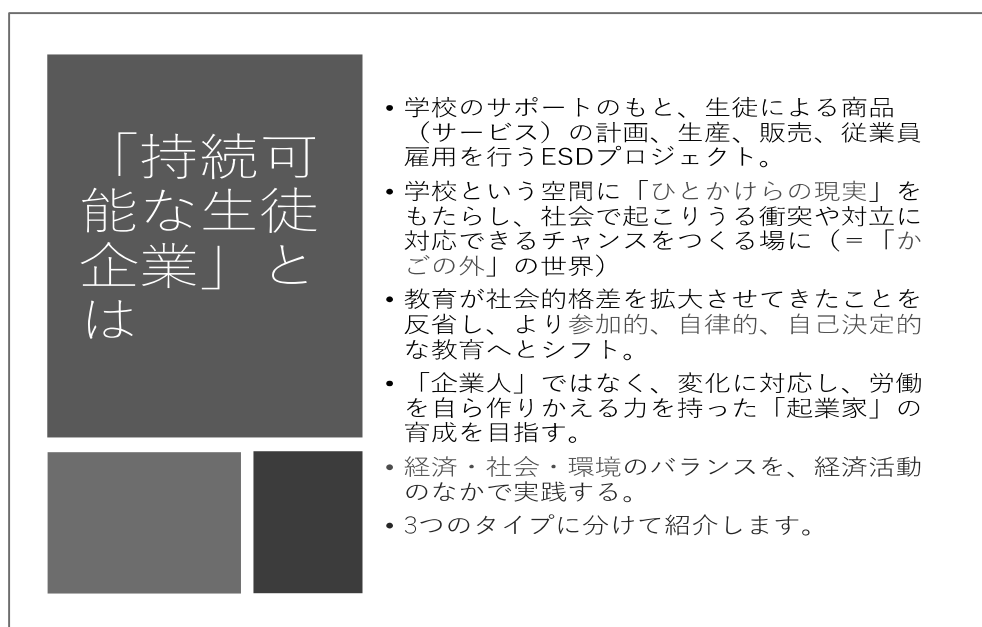
また、最近、皆さんは SDGs という言葉をよく聞くと思うのですが、これは ESD の後、2015 年から 2030 年、まさに今ですが、そこに向けて「持続可能な開発目標」というゴールを設定して提起されている国連主導のプロジェクトです。ここで「教育」が 4 つ目の目標に入っていて、「全ての人々に包摂的かつ公平で質の高い教育を提供し、生涯学習の機会を促進」とあります。さらに「全ての学習者が持続可能な開発を推進するための知識とスキルを獲得するようにする」ことが目指されています。先ほどの ESD によって①具体的スキル、②社会的スキル、③自律的な行動というコンピテンシーを、すべての人が獲得するという目標

が、SDGs の時代になってようやく明確に設定されました。

しかしこれはそもそも、すでに 1985 年の「ユネスコ学習権宣言」から目指されてきていたのです。ここでは「学習活動は…人々を、なりゆきまかせの客体から、自らの歴史をつくる主体にかえていくものである。それは基本的人権の一つであり、その正当性は普遍である。」といわれていました。

ドイツの教育に格差がある限り、行動できる人はどんどん高学歴層に集中してしまいます。全ての人が主体になるというユネスコ学習権宣言から、SDGs の時代になっても学校が学歴偏重であるのは解消されないわけです。何をつくりあげるかはその時代によって違うでしょうが、自分が人生、社会、地域をつくりあげる主体になるという教育の目標は変わりません。しかし、現代は当時よりもっと格差が広がり、参加して社会をつくっていくことが難しくなっている。それは、日本にいとちよっとわかりづらいのですが、ドイツを見てみるとよくわかります。「持続可能な生徒企業」活動がどうしてドイツで重視されているのか、ここでわかってくるとおもいます。一部の高学歴層が積極的に環境行動を行っても全体の環境保護は達成できない。環境だけでなく経済や社会も、全てが同じように、一部の人だけが活発で、それ以外の人たちがなりゆきまかせの客体になってしまっているという状況から脱していくべきであるという ESD の問題提起に、「持続可能な生徒企業」は応えるものであると捉えられています。

4. 持続可能な生徒企業の実践例



「持続可能な生徒企業」とは

- 学校のサポートのもと、生徒による商品（サービス）の計画、生産、販売、従業員雇用を行うESDプロジェクト。
- 学校という空間に「ひとかけらの現実」をもたらし、社会で起こりうる衝突や対立に対応できるチャンスをつくる場に（＝「かごの外」の世界）
- 教育が社会的格差を拡大させてきたことを反省し、より参加的、自律的、自己決定的な教育へとシフト。
- 「企業人」ではなく、変化に対応し、労働を自ら作りかえる力を持った「起業家」の育成を目指す。
- 経済・社会・環境のバランスを、経済活動のなかで実践する。
- 3つのタイプに分けて紹介します。

図9 高雄綾子氏作成、提供による

皆さんの前半の発表を聞いて、ドイツと似ている部分と違う部分がありました。ドイツの生徒企業は基本的に企業なので、お金を儲けることを目的としている点が違うと思います。

お金儲けなんて、あんまりきれいなことではない、教育的にはよろしくないと思われる日本の教育関係者の方も多いと聞いているのですけれども、お金儲けというのは、社会を作る大事な経済ですね。それを、持続可能にしていくというのがこの生徒企業の目的です。学校が基本的にサポートしながら、生徒が主体となって商品の計画・生産・販売・従業員雇用を行う ESD プロジェクトです。

このように生徒企業は、学校という隔離された空間に「ひとかけらの現実」をもたらし、社会でおこりうる衝突や対立に対応できるチャンスを作る場を目指しています。村田先生が「人間と教育 第96号」に書かれた論文では、KOKŌ 塾の活動は「かごの外の世界を学校の中に取り込む」と表現されていました。かごの外を体験することができる、かごの外の世界に学校を開いていくという点は、ドイツととてもよく似ていると思います。

また学歴格差が、自己主張できる人を一部の人に限定してきたことや、学校自体が格差を拡大させてきたことを反省し、より参加的、自律的、自己決定的な教育へとシフトしていこうとするものです、このため生徒企業では、サラリーマンではなくて、変化に対応し、労働を自ら作り変える力をもった「起業家」の育成をめざしています。これはユネスコの学習権宣言にも重なるものです。

そして「持続可能な」という言葉がついているように、経済、社会福祉、環境の三つのバランスをとりながら、実践するものです。これらを3つのタイプに分けてご紹介します。

■タイプⅠ 4.1-1. シュタインブリュッケ



図 10. 高雄綾子氏作成、提供による

まず、ベルリンの学校の「シュタインブリュッケ」は、「エシカルジュエリー」という、環境や人権に配慮した採掘方法で生産されたジュエリーを輸入・加工・販売するフェアトレ

ード企業です。ジュエリーの原石、金・銀・ダイヤモンドなどは、南米や中国など途上国での採掘が多いのですが、そこではものすごく劣悪な環境の中で、現地の貧しい農民や子どもたちが駆り出されて、かなり安い賃金で採掘されたものが、市場に高値で出回っています。特に、女の子の皆さんは、彼氏からダイヤをプレゼントされるような時がきたら、これはエシカルジュエリーですかと、聞いてみるといいかもしれません。

原石の見本市などで、世界中で取引する百戦錬磨のビジネスマンと、高校生が対等に交渉し、採掘現場についても、労働条件はどうですか？環境破壊していませんか？などを質問し、それによって取引業者を決めています。品質だけでなく生産背景も厳しく品定めして、これを持続可能性の観点から自分たちが売ることができるかを吟味しているわけです。

この企業がおもしろいのは、毎月、ローテーションで社長が変わり、先生は後ろでサポートするという立場ということです。民主的な運営で環境や人権に配慮した採掘方法で生産されたジュエリーの存在を広めるという企業方針です。そして、ジュエリーであげた利益を、次年度に投資するだけでなく、マダガスカルのストリートチルドレンプロジェクトやトーゴの障害者学校に寄付をするという、グローバルな持続可能ではない状況に対してもアプローチしています。

4.1.2 レーテ統合学校



図 11. 高雄綾子氏作成、提供による

次は、学習困難な子どもの特別支援学校センターにもなっている「レーテ統合学校」です。

統合学校は進学コースと職人・専門職コースが統合された学校です。とはいえ実態は学力差が大きいので、クラスは分かれていますし、このように特別支援学級の子たちは一緒に学べません。そこで、クラスの垣根を越えて、地元の有機栽培食材で健康な朝食・昼食を提供する学校カフェテリア運営活動が行われています。

経営目標は、①環境にやさしい経済、②健康な食事、③省エネ、④売上向上、⑤チームワーク、⑥従業員の満足、の6点です。24名の生徒が週4日放課後に活動しています。課外活動のようですが、学校の授業である社会科、芸術、英語、ドイツ語、数学の科目とも連携していて、学習活動としても行われています。

ここでも、売り上げの一部をナイジェリアの学校に寄付していて、グローバルな活動も行っています。障害を持つ子どもたち若しくは学力困難な子供たちも一緒に学び、活動することがポイントで、そこで、従業員の満足もめざしています。環境に配慮して養蜂やガーデニングも行い、地域にもカフェテリアを開いて貧困層の人たちなども格安で食べられるようになっています。

■タイプⅡ 地域でお金を循環させる

地域の様々な施設やイベントのポスター、グラフィックウェブデザインを行う企業「スクールアート

ニーダーザクセン州オルデンプルク市フレテンライヒ統合学校

「スクールアート」



事業内容

- グラフィックデザイン
(フライヤー、ポスター)
- ウェブサイトデザイン
- インターネット・PC
サービス
- 各種出版物作成

お得価格で
プロフェッショナル!
(個人の注文も歓迎)

igss
Fildesbach

- 学校の卒業アルバムづくりから起業。
- 地域企業、イベントの広告デザイン
- IT事業部門で地元高齢者のPC教室やメンテナンスも

Schülerfirma
Schulwerk
163 Fildesbach
Hochfelder Weg 169
28125 Oldenburg
04743 92300-20

図 12. 高雄綾子氏作成、提供による

2つ目の「地域でお金を循環させる」タイプでは、ウェブデザインの企業、「スクールア

ート」をご紹介します。最初は学校の卒業のアルバムづくりから起業して、現在ではグラフィックデザイン、ウェブデザインなど、地域企業やイベントの広告を手掛けています。

また、インターネットやPCサービスを行うIT事業部門では、高校生が地元の高齢者に教えてあげるパソコン教室やメンテナンスなどを、「お得でプロフェッショナル」に提供しています。

地域のイベントのポスターでは、協賛企業など必要な情報を全部入れて配置していたり、美術館の企画展示のポスターでは、非常に芸術性高いデザインにするなど、多様なニーズに対応していますね。PCを使った情報処理、コンピューター技術に加えて、地域の企業のニーズを通じて地域経済を学ぶ経済の授業とも連携しています。

さらにクリエイティビティやチームワークを身につけられるというお話もありました。地域の銀行がこの企業に融資をするようになったので非常に大きな額も動かせるようになったことを喜んで話してくれていました。

タイプⅢ 自律的な起業家になる。

ニーダーザクセン州エルプマルシェン協働総合学校=協働総合学校(KGS)



「Fun and Production」

- 選択必修科目の授業として成績まで含めてカリキュラム化
- 活動は週1回
- 4つの事業分野
 - 社会福祉
 - リサイクルファッション
 - 金属・木工
 - 自転車リペア

図 13. 高雄綾子氏作成、提供による

最後に「自律的な起業家になる」タイプでは、ビジネス系の選択必修科目として授業として展開されている生徒企業「Fun and Production」をご紹介します。KOKO塾には5つのワーキンググループがありましたが、ここでも4つの事業分野 社会福祉、リサイクルファッション、金属木工、自転車リペアに分かれて活動しています。これは選択必修科目の授業の

一環としてカリキュラムに組み込まれているので、課外活動と違って授業として週に1回行われています。ファッションに興味があったりミシンを使えることもあり、リサイクルファッションにはやっぱり女の子が多いですね。金属木工や自転車リペアは男の子が多く、社会福祉は男女混ざっている感じです。

この活動の特徴は、「労働と経済」という選択必修科目と連携して企業経営を学ぶため、現場の活動だけではなく、企業のマネジメントを行う経営部門や、新しい人材を雇用するための人事部門があることです。

経営部門の子たちのマッショナ様子(下図)は、とても企業の経営をやるようには見えませんが、コンピューターを使って、売り上げや設備投資などをシミュレーションしています。人事部門も履歴書を吟味して次に採用する人たちの相談をしたりします。

カリキュラムではまず就活をしなきゃいけない。自分がどの部門に就職したいか、これまでの活動履歴やスキルなどとともにエントリーシートに書いて、面接を経て人事部門に採用されないと、この活動には参加できません。



図 14. 高雄綾子氏作成、提供による

ドイツの労働市場の特徴として、正式入社後にも試用期間といういつでも解雇できる期間があり、成果が悪い人や、怠け癖たり遅刻するとここで解雇されます。この実際のドイツの労働市場にある制度を学ぶために、生徒企業にも試用期間があります。

晴れて契約すると4分野の活動を行いますが、その評価も毎回、生徒自身が行い、それが成績につながります。この「ポートフォリオ評価」についてはまた後でお話しします。

3つのタイプに分けて持続可能な生徒企業をご紹介しました。その効果というのがドイツ社会の中で教育が持っている問題、学歴格差と一部の人への行動力の偏りをどう是正しているかということを最後にお話しします。

まず、これは本当にKOKO塾やCGSと共通する点ですが、エンパワメントです。

効果(1)：エンパワメント（学習が自信に）

- ・「社長として強くなることを学んだ」(シュタインブリュッケ、16 歳)
- ・「一人前になった気分です。ほかの多くの教科と違い、とても刺激的でモチベーションが上がる」(Fun and Production 18 歳)
- ・「個人としてはあまり大きなことはできないけど、皆と一緒になら社会に役立つことができる」(スクールアート、18歳)
- ・「将来は写真家や絵画アーティストとしてのキャリアを積む」(スクールアート、18歳)



自分の限界を知り、人とのつながりの重要性に気づくことは、市場を介した外部との交渉過程によるエンパワメントである

エティエンヌ・ウェンガー, “コミュニティ・オブ・プラクティス”, 翔泳社, 2002, p.109

図 15. 高雄綾子氏作成、提供による

「社長として強くなる事を学んだ」「とても刺激的でモチベーションが上がる」「皆と一緒になら社会に役立つことができる」「将来は写真家やアーティストのキャリアを積む」など、生徒の感想からは学習が自分の自信につながり、将来設計につながっていることをうかがい知ることができます。これは、学ぶことが成績によって序列化され、自分の成績が上がった、下がったということだけを一喜一憂するのではなく、将来を見据えて自分の人生を作り上げるための自信につながっていることを示しています。

ウェンガーさんの『実践的コミュニティ』という本には、「自分の限界を知り人との繋がり的重要性に気付くことは、市場を介した外部との交渉過程によるエンパワメントである。」と書かれています。自分自身に自信を持つためには、序列化による競争ではなく、人とのつながりの重要性に気付くことが大事なんですね。

現代社会では SNS など様々なネットワークがありますけれども、やはり大人になるという意味では、人とのつながりは市場、つまり経済活動を介して外部と交渉や協力をしていくことで生まれ、そのつなが

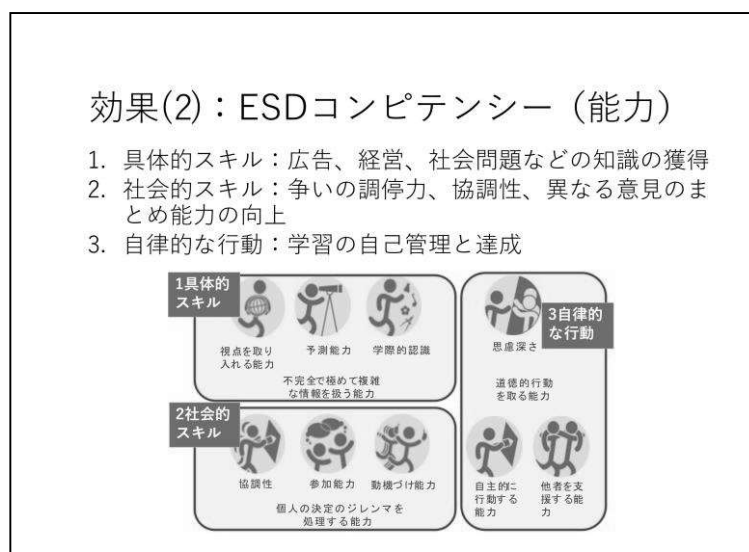


図 16. 高雄綾子氏作成、提供による

りを通じて自信を持てるようになるわけです。それが学習を通じたエンパワメントになるということを、高校生の時から学ぶことが、一つの効果と言えます。

次に ESD というとはやはり能力、コンピテンシーの獲得です。特に大学進学コースでない学校で獲得できる能力はスキルというものに限定されがちですが、もっと広いコンピテンシーという言葉で ESD では表現しています。1 つ目の具体的なスキルはいままで紹介してきた中でお分かりいただけたと思います。

広告や経営、デザイン、社会問題などの具体的な知識やスキルを獲得できました。さらに、2 つ目の社会的なスキル、3 つ目の自律的な行動についても効果があると評価されています。

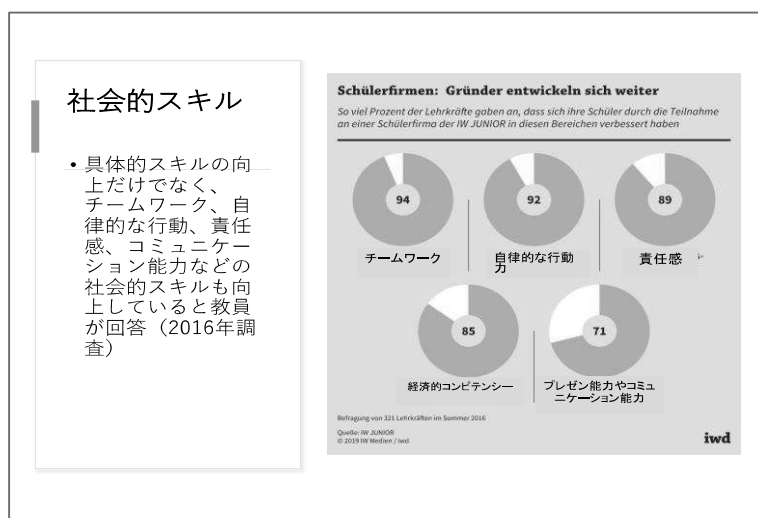


図 17. 高雄綾子氏作成、提供による

社会的スキルはチームワーク、他者を動機づけるためのプレゼン能力やコミュニケーション能力です。最も生徒企業での効果が高いのがチームワーク、それから責任感です。これらは教育でぜひ身につけてほしい能力ですが、学歴を目指すだけの個人プレーの教育ではなかなか身につけません。

自律的な行動

- 成績は自己評価のポートフォリオ形式
- 自己評価だと自分に都合の良いことばかり書きそう？
- 協力的個人主義に基づき、各自授業で獲得した自己表現スキルを発揮して、個人の利害・関心に基づき協力する。

リサイクルファッション事業部門:	
活動内容()	名前()
今日の課題:	日時
自分が行った活動を記録し、1～6で評価しなさい。	
詳しい活動内容	評価
活動内容の効率性を割合(%)で表しなさい。 %	
以下の質問に端的に応えなさい	
a) 今日は何を学んだ?	
b) 活動で改善されたことは?	
c) 誇りに思うことは?	
d) 同じ活動をより良くするためには?	

第三者評価 (先生)
成績

図 18. 高雄綾子氏作成、提供による

そして自律的な行動とは、自分と友達、仲間、他者、地域の人など、プロジェクトをみんなと一緒に遂行していくために、個人個人が自律した行動をとれる能力です。これが表されているのがポートフォリオという自己評価を通じた成績評価手法です。

先ほどの「Fun and Production」では、事業部門ごとに毎回、自分で活動内容の記録を取り、どれだけ自分が効率的にその活動内容を遂行できたかどうかを評価します。

そして自分で、今日は何を学んだか？活動で改善されたことは何か？自分はなにを誇りに思うか？同じ活動をよりよくするためにはどんなことができるか？ということ記録し、それをファイル化してまとめておきます。

学期の最後に第三者に、この場合は先生ですが、このポートフォリオを提出して評価してもらい、最終的に成績になります。学校ではテストで成績がつくのがほとんどだと思うのですが、実は社会に出るとこういうポートフォリオ、つまり日々の活動の積み重ねで評価されます。そしてその日々の活動を自分自身がどう振り返り、どう自分とそのチームのモチベーションを上げていったかということも評価される。

社会に出て本当に役に立つのは、自律的な行動をするためのポートフォリオ成績評価です。自己評価だと自分に都合のいいことばかり書きそうですが、活動の最終的な達成度を皆が高めていかなくてははいけないので、そんなことはしません。

みんな真剣に、自分自身が自律的に行動できたか、また他者と一緒に協力できたかどうか振り返って記入し、次の活動につなげていきます。

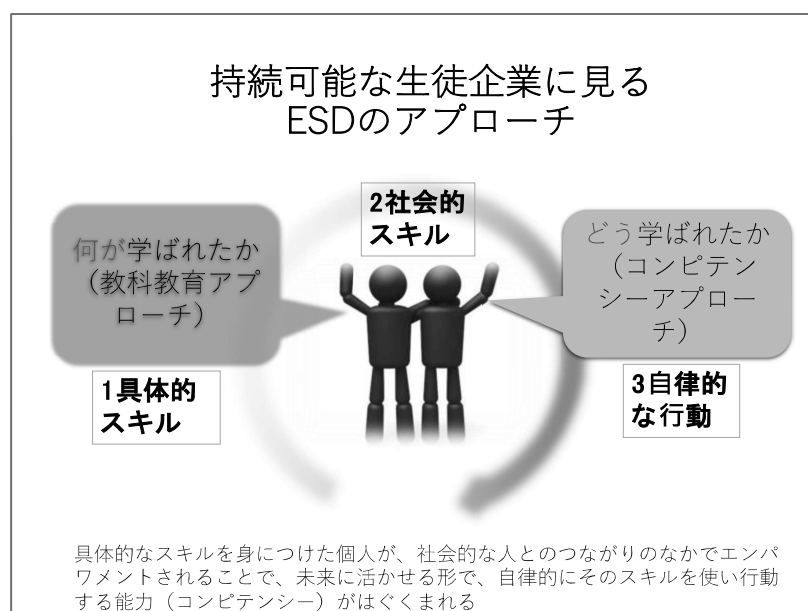


図 19. 高雄綾子氏作成、提供による

この持続可能な生徒企業に見る ESD コンピテンシーは、何を学ぶかよりもどう学ぶかを重視するアプローチでないと達成できません。教科教育中心の学校教育を変えることで、社会の中で主体的に人生を作り上げることができる主体を育てることが、二つ目の効果といえます。

5. 活動を支える地域のサポーター



図 20. 高雄綾子氏作成、提供による

最後に「ESD マルチプリケーター」という地域のサポーターについてご紹介します。マルチプリケーターとは拡散する人という意味で、学校外の ESD の専門家です。この養成講座が 6 年にわたって 3 回行われましたが、最後の回が、生徒企業に特化したものでした。そこで専門家に求められたのは、学習環境としての教師と生徒の関係の変化を促すことです。

生徒と教師の関係が固定化している学校教育において、生徒企業活動を通じてひとかけらの現実をもたらし、その関係が変化していくのを、学校外のマルチプリケーターが専門的に支援していくことが求められていました。先ほどの「スクールアート」のマルチプリケーター、ユルゲン・ドリーディングさんは、生徒企業の設立や継続的な運営のサポート、コンサルティングはもちろん、専門家として入ることで、生徒-先生間の関係を相対化し、新たな学びを組織することも活動の重要な部分でした。生徒と先生だけだどうしても関係が固定化されてしまうところに、地域の専門家が入ることで、そこがフラットになっていきます。



図 21. 高雄綾子氏作成、提供による

地域サポーターとしてのマルチプリケーターには、3つのレベルで専門家としての能力が求められています。大きなマクロのレベルでは、学校教育から職業への移行という社会のなかでの役割の保障、真ん中のメゾのレベルは、学校教育の文化や質の管理、小さなミクロのレベルでは、個人の ESD コンピテンシー獲得の支援です。生徒企業のマルチプリケーターは、特にこの真ん

中のメゾのレベルで生徒と先生の変化させ、生徒が参加できる学校文化や環境を整えていき、それが学校の質の保証に繋がっていくという流れができています。地域のサポーターと学校が協力する意味というのは ESD による学校の質の向上と新たな学びの組織化であり、これは従来の教員が持っているスキルだけでは必ずしも十分でない分野です。村田先生が書かれている「かごの外から窓を開けてくれる人」は、かごの中にいる人とは限らないのだということが言えます。

ただ、学校の外の人が入ってくると摩擦も起こります。教えることと管理することを見直し、痛みを伴いながら構築しなおすといというのは、学校側も非常に大変な思いをするかもしれません。それでもやはり、学校を地域に開いてもっと柔軟にしていこうと必要性を感じている学校が、痛みを伴いながらもサポーターと協力していくことによって、持続可能な学校づくり、地域づくりの中核になっていくのではと思います。

ドイツの生徒企業は、グローバルな問題をはじめ、国内の学力・賃金格差という問題と、その足元の地域社会という課題の中で、教える学ぶプロセスを問い直す活動といえます。最後になりますが、養成講座の中で言われたことをご紹介します。「今の教育は、学ぶ人がその学びを通じて生活の中で自由に使えるチャンスが期待できるようなものにはならないために、自分の問題とは取り上げられず 目的を見失っているのではないのでしょうか。」これで発表を終わらせていただきます。

■質疑応答

村田：ありがとうございました。ESD の実現をめざす生徒企業の 3 つのケースをお話いただきました。いわゆる日本では、商業高校とか工業高校がありますが、生徒企業をやっている高校生というのはそういう高校のような、いわゆる日本でいう普通高校、特に進学校ではないと理解していいですか？

高雄：そうですね、日本でいう大学に進学する普通高校というのはドイツでは進学校に入ります。生徒企業の 70%は、そうではない学校で行われているので、低学力、低モチベーションが問題となっているので、それに対応する取り組みになっています。

村田：日本でもいわゆる商業高校とか工業高校でスクールビジネスプロジェクトという形で地方活性化などの目的も併せ持った生徒企業があります。

素朴な質問ですが、ドイツの生徒企業経営の経済活動で得られ収益は、寄付されるというお話もありましたが、高校生にも入るのですか？

高雄：それは生徒企業によっていろいろで、半分従業員に支払うという生徒企業もあるんで

す。それはもう完全にアルバイトじゃないかって、すごい物議をかもしたこともあります。あとはすべてを次年度の設備投資や活動費にまわすという学校もあります。

村田：学校の管理のもとですね、そのお金は。

高雄：そうですね。

村田：そしたら高雄先生お時間になってるんですがですが、せっかくなので、もうちょっとどうしてもという生徒さんがいたら、ちょっと聞いてみます。

この機会にどうしても質問したい人、粉河高校会場からの質問で限定させていただきますはいどうですか？質問。大学の先生もおられますので自由に。せっかくなので高校生に聞いてみたいのですが。さっき発表してくれた福祉班。何か質問ある？あるいは感想

もっともっと質問あると思うのですが、皆さん遠慮してると思うんですね、一つだけ、今高校生が、高校生が企業活動してそれを支えてくれる仕組みはすばらしい。単純に KOKÔ 塾と比較するわけにはいかないと思うんですね。高校生も、KOKÔ 塾もまさに地域の支えがあって高校生が先ほどの盆踊りプロジェクトの報告があったように支えがあって実現していると思うんですが一つだけマルチプリケータードというイツの支える人がどんな人というか何か条件があるんですか？

高雄：それは本当に日本と大きくたぶん違うところだと思うんですが、ドイツの場合はもともとフリーランスで学校コンサルティングみたいなことをするような職業の人は割といるのですね。地域社会の中に。先ほど言ったように学校って本当に何もしないんですよ。

生活指導も部活も、学校が生徒の進路に関与する割合が低いので 親の影響がものすごく影響します。だからフリーの学校支援コンサルタントみたいなことをしている人が割といて、そういう人たちが NPO を作って、政府の助成なんかも受けています。そういうところの人たちが、自分の所属する NPO から派遣されて研修を受けて、データベースに登録している、そしてマルチプリケーターになって地域に入っていきます。

元々地域の中でそういうコンサルティングしていた人たちが、また新しい専門知識を身につけていくための養成講座です。そしてもう一つ個人でそういうことをやっている人もいます。

村田：あ、一人手あがっています。どうぞ。1年生、はい。皆さん拍手でお迎えください。

生徒：なかじまはるかです。生徒企業のお話をされていましたが、それは何をきっかけにいつ始まったんでしょうか？

高雄：ドイツでこれが広まってきたのは1980年代からです。生徒企業自体は実はアメリカとイギリスが先行して始めました。1960年代くらいに、Pupil Enterprise という名前で始まりました。やはりドイツと同様、アメリカもイギリスも学校教育の硬直化というのがかなり早い段階で訪れていましたので、教育を変える可能性をもったプロジェクトとして、すごく注目されたというのがあります。そこから、まずは企業活動だけだったのですが、持続可能性とか環境問題とかが地域問題にかかわるようになってきたのはやっぱりドイツ特有の現象になっています。

生徒：

はい、ありがとうございました。

村田：

はい、ありがとうございました。そしたら本当にまだまだたくさんお聞きしたいことがあるんですが、時間になりましたので、終わらせていただきます。生徒のみなさん知っていましたか？ドイツ日本の教育制度の違いや、ドイツの生徒企業について、初めて知った人たちも多いと思います。今日は高雄先生をお招きして、オンラインということではありましたが、ドイツのESDの取り組みと生徒企業の一端を学ぶことができ本当に感謝しています。どうもありがとうございました。

その後の高雄先生とのメールから・・・

村田先生のマルチプリケーターに続いて、別メールで横出先生から詳細なご感想とご質問をいただきましたので、こちらで分かる範囲で回答させていただきます。

(1)マルチプリケーターについて：私が出会った方々は、もともとESD、もっとたどれば環境教育関連で、学校プロジェクトをサポートするNPOやフリーランスの方々でした。ただ生徒企業では、環境教育やESDよりももっと、学習困難、学級崩壊、若年失業の問題を意識して活動しているようでした。そしてプロジェクトを運営する学校教員がカウンターパートとなって、学校の中に入り込んでいくという形です。最初から校長が依頼したり、行政の教育部局が推進するようなパターンはまれで、学校の中で熱心な教員が自力で探してくるような形が多かったです。

(2)授業、クラブ、自主活動の違いについて：横出先生から、ドイツは授業で、串本はクラブで、粉河は自主活動で展開されており、それぞれの長所・短所の分析が今後必要になるというご指摘をいただきました。授業はすべての生徒が参加出来るが、授業を離れると参加しないという問題があり、ドイツは学校としてどのような教育を行うのかを問うているというご指摘です。おっしゃるとおり、ドイツは授業と連携することをかなり意識して

います。一般にドイツの学校では教員の責任範囲は授業だけで、基本的に子どもの人格形成は担いません。クラブ活動も少なく、プロジェクト担当教員だけが熱心に課外活動する状況なので、授業と連携することで、その他の教員を巻き込み、学校全体で取り組む体制を作ろうとしています。このように学校の社会的位置づけによって、それぞれの長所・短所も変わってくるのではないかと思います。生徒の自発的な参加という視点から、それぞれを比較することは非常に面白いと思います。

(3) ギムナジウムと職業系学校について：横出先生から、ギムナジウムで生徒企業が少なく、職業系学校で多いのはあまり目新しくなくて残念、というご感想をいただきました。これは私の説明が悪かったのですが、ギムナジウム以外の学校は、完全に職業系という位置づけではなく、「大学」進学を目指さない学校種という区分けになります。ドイツでは「大学」の呼称はかなり限定的で、いわゆる日本で言う総合大学のみに適用されます。ギムナジウム以外の学校から、文系学部のみ、もしくは工学系のみ的高等教育機関に進む生徒は多く、これらは日本の大学と変わらないので、ギムナジウム以外の学校が完全に職業系学校という区分けにはなっていません。また近年、ギムナジウムとそれ以外の学校を統合した「統合学校」が増えており、事例で紹介した学校もすべて統合学校でした。ドイツはもちろん将来の職業を日本よりも明確にイメージしている生徒が多いのですが、完全な職業系学校という訳ではないことを補足させていただきます。

(4) 「学校教育」か「社会教育」か：粉河高校を見学したドイツ人の先生たちが KOKO 塾の活動に対して発した質問ということで、大変興味深いです。(2) で書いたように、ドイツでは「学校教育」がカバーする範囲がとても狭いです。19 世紀以来のキリスト教的家庭観や大戦時のナチズムの経験から、意図的に狭くしていると言われています。またドイツで「社会教育」という言葉は、どちらかという社会福祉の領域における支援教育の内容を指すことが多く、いわゆるふつうの子どもたちに向けた学習活動は想定されません。このため KOKO 塾の手厚いサポートや密接な人間関係が育む豊かな学習環境を、学校教育ではないとドイツ人の先生達は感じたのだらうと思われます。でもドイツでも、近年の知識社会化、少子高齢化などの社会変動により、子どもの人格形成に学校がより積極的に関与するよう求められるようになっていきます。(3) であげたように学校種ごとの垣根は撤廃され統合していく方向に進んでいるので、学校と家庭、地域社会の垣根も問い直されている状況です。

以上、個別に細かく回答させていただいたのですが、全体として、KOKO 塾の活動はドイツよりもずっと進んでいると思います。生徒の自主性、自発性を育む学校、地域社会の連携は、ドイツでも大きな課題です。ぜひこの点について先生方からご指導賜れたら幸いです

第三部 KOKÔ 塾に寄せて- 関わってきた人の思いを聞く

村田：今日は皆さんご参加いただきましてありがとうございます。本日は、60人以上の方にご参加いただきました。

チャットにもすごくたくさんのご意見とご感想を出して頂いていまして感謝しております。

それでは残り時間少なくなりますが、第3部 KOKÔ 塾に関わってきた地域や先生OBたちの思いを受けとめあうということで粉河高校会場を中心に進めていきます。

皆さん、今日の感想や意見をどうしても言いたい方から声をあげてもらったり先ほどのZoomのサインを送っていただいても結構です。

それでは早速に口火を切っていただきたいのですが、どなたか粉河高校の先生でKOKÔ 塾に関わってきた思いや今日の感想言っていただける方がおられましたらご発言お願いします。

南先生いかがですか？

南：南です。はい感想、ちょっと急なふりを頂いたので、まとまってもいないんですけど、個人的には生徒のみんなが自主的に身につけた能力っていうことがいろんな文脈から評価されていたのかなという風に思います。

多分学力って、使える能力であって欲しいなあというのは僕ら教師の願いでもあり、それがKOKÔ塾の活動で生徒の成長が可視化されるっていう状況を見せてもらえた中で確認できたのかなという風に思っています。ちょっと急に振っていただいたんで、これ以上今しゃべれないので、また思いついたら発言させていただきます。ありがとうございます。

村田：無茶ぶりの村田で多分有名だと思いますので。第一部では、串本古座高校の西岡先生、元粉河高校の生徒さんと、KOKÔ塾情報班として活躍し、現在26歳となった青年教師のこれまでと今をご発言いただいたんですね。

KOKÔ塾19年、来年度20年を迎えるKOKÔ塾は、とても多くの成果をうんでいます。その中にひとつだけあげるとすると西岡先生のように元KOKÔ塾生が、様々な社会の現場に出て活躍され、今回のように先生になって登場していて高校生達の前に再び現れている。

さらに言えば、地域との関係をつくっていく実践者の先生として再登場している。これは、KOKÔ塾にとっての大きな成果だと思っています。

実は西岡先生と同様に粉河高校にも今年度田中先生と言う元KOKÔ塾高校生が登場しています。田中先生から一言もらいたいと思います。よろしくお願いします。

田中：ただいま紹介していただきました田中です。さきほど紹介いただいたように、僕は2009年に卒業しました。

今日は粉河高校の教師であると共に、ずっとKOKÔ塾のファンであり、KOKÔ塾の元門下生でもあるという立場で参加させてもらいました。

母校に帰ってきて、KOKÔ塾に関わりたいなと思っていた矢先今年度はコロナの影響であまり活動できてなかったので、本当に残念で仕方がないです。自分がKOKÔ塾をやっているって発表した時も楽しかったですけども、それ以上にというか、今日発表された3年生の二人2年生にいろ

んな話聞いて面白くて、堂々として「すげーな」と感じました。

印象に残ったことを一つだけ言わせてもらおうと、松原さんの大人と話すことが全然怖くないっていうか、違和感なくてということ話を話したと思うんです。

それが KOKÔ 塾で身につけることができるひとつの力なのかという風に思って、今日はその答えを一つ得たような気がします。

「よそ者・若者・ばか者」という話もあったと思うんですけど、勉強しないばかはダメやと思うんですけど、高校生として勉強して欲しいんですけど、ある程度教養つけて、いい意味で空気を読まずやりたいことを発言できる、発言したことを実行できる力が KOKÔ 塾で身につく力の一つなのかと思います。そういう生徒の成長を今後ぜひ粉河高校の教員として関わって見ることができたら嬉しいなと思いました。ちょっとまとまっていないんですけど、ありがとうございました。

村田：ありがとうございます。それでは林さんどうですか、まさ先生。

林：こんにち。林です。非常に嬉しい思いで今日も参加させて頂いています。

私は高校の時も粉河高校でして、粉河で勤めさせてもらうのは 2 回目なんやけれども、ここ数年 3 年生を担当することがあって、3 年生が進路面接の時にも、誇らしげに粉河の特徴である KOKÔ 塾のことを多くの生徒が語ってくれます。

KOKÔ 塾に参加して地域との交流ができたことをとても誇らしげに自己 PR とか、プレゼンに活用しているのを見て、ああやっぱりすごい活動やなあ、というのを感じています。

KOKÔ 塾の活動ですが、私は、ずっと福祉班を担当させてもらっているのですが、幼稚園の子から高齢者までいろんな方々

と接して、生徒たちが粉河の地域へ歩いていく姿、粉河の町が活気づくんですね。地域の人が非常に喜んでくれる。

かつては、粉河駅からちょうど粉河寺へ行く道真ん中にとんまか通りの商店街。粉河へ行ったら無い物はない、皆揃うというくらい活気づいていた粉河が、今ちょっとシャッター街で本当に寂しい思いをしているのですが、この地域の中にある粉河高校が地域におりていって、そして高校生が歩く、高校生が参加することで地域の人々がすごく喜んでくれる。こんな取り組みをずっと続けていってもらえたらなあと応援しています。以上です。

村田：ありがとうございます。ここでちょっと視点を変えまして、和歌山大学からも参加させていただいています。

和歌山大学佐藤先生どうでしょう。今日会場にお越しになっておられますが。

佐藤：はい、聞こえますでしょうか。私、佐藤と申します。KOKÔ 塾の活動を見させていただきまして、生徒が主体的になって活動しているのを見て、なかなか他にはあまりないような活動だなと思いました。

私は和歌山大学に来て、時間が浅いので、この活動を知るのも短い時間なんですけども、これまでの取り組みというのが積み重なって今の活動になっているんだなあというふうに思っこの発表を聞かせていただきました。

特に、先ほどもでていたように、高校生が大人と話すのがうまく何というか恥ずかしいとか、しっかきできるようになったという話というのは、やっぱりこういう活動をやっていたからできるようになったというのは KOKÔ 塾の力じゃないのかなと思います。

村田：ありがとうございました。それでは和歌山大学で聞いていただいている先生方、金川先生おられますか？

金川：はい、おります。

村田：はい、ありがとうございました栄谷でご参加ですか？

金川：えっとね、今日は自宅からです。

村田：ああそうですか。一言どうぞ。先生、ご感想などを。

金川：村田先生からいつも KOKO 塾のお話聞かせて頂いていて、私は福祉をやっておりますけれどもいつもすごいな一っていうふうに聞くだけで、思っておりました。今日実際の活動の取り組みを見せて頂いて、高校生の皆さん方の力強さを感じました。

私は地域福祉のポイントは「人育て、ネットワーク育て、まち育て」。3つの育ての循環が回ることというふうに言っているんですね。

人育てっていう点ではもう本当に KOKO 塾の卒業生の方が登場しているというふうなところ。

そしてネットワーク育ては、やはり、とんまかを中心として、あるいは他の福祉での保育所との連携盆踊りのことであるとかそういった形のところで、連携がすごく繋がっているんだなというふうに思いました。

そして、それがその一つの、この地域の町の姿になっているんだなあというふうに、非常に頼もしい連関というのを感じました。

高雄先生がチャットに書かれているようにみなさんの活動はドイツでもとても反響があると思います、というふうに書かれておりました。世界に誇れる活動なん

じゃないかな、これからの活動、まさに20年迎えての活動に期待しています。以上です。

村田：ありがとうございました。串本古座高校からも関係者の皆さんが参加いただいていますので、堀君どうですか？

串本古座高校を卒業して社会へ出て、今日参加してくれました。

今日の感想、一言お願いします。

堀：はい、そうですね、僕も今回 KOKO 塾というのは初めて聞きましたが、いろいろな粉河高校の活動を聞かしてもらって、地域に貢献しているというのがすごくわかりました。

それで母校の CGS 部に関しても、少し粉河高校と近いかなという感じがしたのでこれからもがんばってほしいと思いました。以上です。

村田：CGS 部、堀さんも高校時代に経験されましたよね？

堀：はい。

村田：ありがとうございました。

今私の画面で静岡大学から阿部耕也教授がご参加いただいているのがわかります。

先日静岡大学のお声がけで和歌山大学が参加させていただき開催された「半島フォーラム」という催しがオンラインで開催されました。ここで、私も「高大地域連携による地域発展学習」と題して串本古座高校と KOKO 塾を事例に発表させていただく機会を得ました。

こうしたご縁とご自身のご関心から本日もご参加いただいたものと思います。阿部先生今日のご感想ありましたら一言お願いいたします。

阿部：お世話になります、静岡大学の阿部ですが聞こえていますでしょうか？全部のご報告を聞く時間はなかったのですけれども、やはり KOKO 塾が持っている継続性と循環性と言うんでしょうか、それを非常に印象深く聞かせていただきました。実は静岡大学も伊豆半島諸島、そういった場所で大学生がフィールドワークに入って高校生と連携をするって場面が多いのですけれども、単なるイベントになって、その先に継続的になっていくのがなかなか難しいという時に、長い期間をかけて学び合いがあって、KOKO 塾で学んだ高校生たちが何人か先ほどもご発言いただきましたけれども、今度は支える方にまわると言うのはそういう循環があるって言うのは非常に大事なことで、継続的な営みが進んでいくためには欠かせない所だと思って、非常にそれは羨ましく思いますし、また、それを維持するために、そういう風にするために、どんな活動がなされてきたのかっていうことに大変興味があります。

ありがとうございました。

村田：ありがとうございます。

辻合さん、和歌山大学卒業後大学院は別大学へ行かれまして、今社会人1年生。どうでしょう？今日の感想一言お願いします。

辻合：こんにちは皆さん、社会人の辻合です。大学を卒業しても KOKO 塾と再会できたことを嬉しく思っています。

それはやっぱり今を生きる高校生たちの活動や存在が、自分をまた KOKO 塾に呼んでくれたんだなと思っています。

KOKO 塾ってやっぱり本当に ESD をつくる、ないしは今ある地域にある ESD に参加していく活動だなあと改めて思いました。そういう活動が地域にあること、また自分自身は、今は大阪府の八尾市で働いているのですけれども、和歌山の方でもユネスコ

の活動を少しさせて頂いています。

自分の高校は進学校で、KOKO 塾のような本物の学びがなかったような経験をしています。大学に入って KOKO 塾に出会って、KOKO 塾を取り戻すかのように大学でサークルを創って、KOKO 塾のまねをして、今、社会人になって、和歌山のユネスコの活動で KOKO 塾をまだ追いかけている人間なので、高校生のみなさんまた是非卒業した時には和歌山のユネスコの活動とか、また地域にある地域に根付いている ESD の活動とかに参加していたら、またいろいろ教えてください。

村田：ありがとう。久しぶりにお顔を見ました。それではね、串本古座高校から西岡先生の先輩、清野先生もご参加いただいています。

清野先生は地域との関係を非常に丁寧に紡いでこられています。一言お願いします。

清野：こんにちは、串本古座高校の清野です。私どもの学校の CGS 部はもしかしたらこの紀南版の KOKO 塾っていうのを目指しながら、今、走っているのかもしれない。

CGS 部ですができて4年目の高校クラブですから、これから先 KOKO 塾がこんなに長い間持続可能にしていきたいいろんなことをまた今後とも教えていただいたらと思っていますのでどうかよろしくお願いします。

村田：ありがとうございました。それでは粉河高校の幡井先生おられましたね？

幡井：はい、います。一番後ろからで申し訳ないです。僕は KOKO 塾に10年間関わらせてもらってきたんですけど、10年間、生徒がすごい発言力とか身につけてきてすごい活動やなあと思っています。僕自身

も他のクラブももちながら大変なこともあったのですが、やっぱりその生徒の成長を見ると、やってきて良かったのかなあと非常に思う次第です。今後どうKOKÔ 塾は変わっていくかわかんないのですが、これからもどんどん発展していったらと思っています。以上です。

村田：最後の一人ですが、新宮高校に異動されて、新宮高校でも KOKÔ 塾をやりたいと話しておられる岡田先生どうですか？岡田先生どうぞ皆さんに久しぶりですのでお顔を見せてあげていただけたらと思います。

岡田：ご無沙汰しております。KOKÔ 塾に7年間携わらせていただき、新宮高校に異動して7年間、一度も参加できず申し訳ありませんでした。

私は、まあ3日に一回はKOKÔ 塾の事を思い出しまして、それぐらい常にKOKÔ 塾での取り組みが自分の頭のなかで鮮明に残っています。今の自分の教育の在り方をつくってくれているというか、それに繋がっているのかなって思っています。

今、自分は新宮高校ですけれども、串本古座高校が隣にありますので、この東牟婁、新宮の地域からも、地域と学校のつながりをもっと深めていって、もっと地域が元気になるような活動を続けていけたらと思っていますので、これからもよろしくお願いします。以上です。ありがとうございました。

村田：ありがとうございました。

先ごろ和歌山県教育委員会主催「マナビィスト支援セミナー」という事業ですが、串本古座高校と地域の皆さんと一緒に学ぶ成人の教育ゼミに岡田先生が参加されました。

新宮高校で開催されている外国にルーツを持つ人たちの学びの場にも関心を寄

せて、地域の皆さんと「きのくに学びの教室」の人たちが交流して十か国の方々が新宮市にお住まいになっていることも調査されました。

地域の人ともっと話したいしもっと触れ合いたいしもっと分かりたい。この美しい地域の自然、もっと知りたいという交流の場で話されたことを、研究成果として発表され、実は岡田先生も熱心に研究を進められました。

今日ご参加頂いている紀南教育事務所の小賀社会教育主事にもサポートいただきました。和歌山県内で人々が学びあう場をつくりながら、先ほど私も言わせていただいたように人が成長することに関わるようなところに身を置いて地域社会の中に人が育ちあう場を一生懸命作り出していくことが重要であると思います。

村田：KOKÔ 塾事務局として長年携わられ、退職後も地域の一人として参加されて高校生と共に学びつづけておられる加藤さんいかがですか？

加藤：KOKÔ 塾で育った元粉河高校生が高校教員となって、実際に今 KOKÔ 塾の経験をいかしながら指導していて、嬉しいなと思っています。

今日の発表の中で松原さん、水口くん2人が教員になって KOKÔ 塾のようなことをやりたいと思っていることを知って、この活動が繋がっていくんやなと思って嬉しくなりました。

村田：それでは大変短い時間でしたが第3部 KOKÔ 塾に携わってきた人たちの思い、そこから学んでいる方たちにお話しいただきました。

今会場内で横出先生から生徒の声が聞こえていないとご指摘があったので、生徒さんの感想をちょっと最後に聞きたいと思います。生徒さん方いかがですか？

私生徒さんのお名前がよくわからないので進行を横出先生にバトンタッチして生徒さんから少し意見、感想を聞いてください。

村田：何か言いたい方はおられますか？今日参加をした感想などあの1分スピーチぐらいでお二方かお三人ぐらいから受けたいと思います。短めの1分スピーチということではいかがでしょうか。どこか手を挙げて？串本古座高校どうぞ。高校生。

上田：串本古座高校2年の上田です。僕が串本古座高校に入学してからまだ2年ぐらいなんですけど、皆さんプレゼンテーションやってた方もとてもうまくて、僕もそれぐらい上手になりたいなと思いました。

それで串本古座高校では今は子どものところにボランティアに行ったりしてるんですけど、老人の方々とも交流とかあったらいいなと思いました。ありがとうございます。

村田：今日を機会に両校の高校生が交流を深めて、お互いに学びあっていくと、もっといいと思いました。ありがとうございました。他にありますか。いいでしょうか。それでは、予定の時間も来ていますのでお名残惜しいですが第3部もここで一旦終了させていただきます。

皆さん、どうもありがとうございました。高雄先生貴重なご講演とともに、最後までお付き合い頂きましてどうもありがとうございました。

この日は、地元粉河の地域の皆様、自治体関係者の皆様をはじめ、和歌山現役学生、教員、大学OB、静岡大学関係者等、70名のご参加をいただきました。



粉河高校生徒たちの感想



2019 年盆踊り復活プロジェクト

1 年 安田 遥

最後の高校生からの感想を問われたとき、手を挙げたほうが良かったと後から後悔しました。少し前に発言したし、私ばかり発言するのめどうかと思ったのですが、やっぱり手を挙げたほうが格好良かったです。次回こそ、たくさん考えて、発言して、議論して、活動したいです。興味深い話がたくさん聴けて本当に有意義な時間になりました。

今日得たことを、これからの KOKÔ 塾に生かしていきます。

先生方、関係者の方々、ありがとうございました。

2 年 岩本 真唯斗

今日のジョイント・フォーラムでは、自分は発言することはなかったが次からはこのような機会があったらもっと発言しようと思いました。

2 年 湯川 仁菜

今日は、ジョイント・フォーラムを通してドイツの学校の制度や、学生たちが起業しているという驚愕な話を聞かせていただき、さらにその活動を支援している大人の方々が多数いることを初めて知りました。話を何時間もリモートで聞くという体験はあまりなかったので、とても疲れましたが、それ以上に生きていくうえで有益な情報や、支え合いの重要性を再確認することができました。そして高校生が、主体となって地域を率先して活性化することによって地域が盛り上がっていくんだなと思いました。

最後に、KOKÔ 塾は 20 年も続いていることが本当に凄いことだなと思いました。20 年も一つのことを継続するということは、一筋縄ではいかないことだと思うので、人とのつながりを大事にこれからも生きていきたいと思いました。

2 年 窪田 愛稀

今回のジョイント・フォーラムで一番驚いたのは、ドイツの教育制度についてです。

小学校は 4 年生までで、そこから進学、商業、工業と将来について早い段階で決めなければいけないことです。また、先生よりも親の方が距離が近く、子供もその道を進むことが多

いのはびっくりしました。

日本は、親よりも先生のほうが、距離が近く先生に影響されやすいと思います。

日本とドイツの教育はこんなにも違うことが分かりました。

串本古座高校の CGS 部の活動はとても KOKÔ 塾に似ていて、また交流できたらいいなと思いました。

2年 西林 美晴

こんなにたくさんの人の前で発表したのは初めてでとても緊張しました。

KOKÔ 塾をやっていないと、こんなたくさんの大人の人の意見が聞けないのでやっていてよかったなと思いました。話はちょっと難しかったけど面白かったです。

次は私たちが主になっていくので頑張ろうと思いました！

2年 坂本 莉穂

今日はジョイント・フォーラムに参加して、人との関わりはすごく大切なことだと改めて分かることができました。三年生の先輩が話してくれたように、自分も大人の人と話すときや、人前で話すときに緊張せず堂々と話せるようになれたらいいなと思いました。

2年 池田 愛瑠菜

今日は色々な学校の取り組みを知れてとてもよかったと思いました。

KOKÔ 塾はたくさんの人の人とのかかわりがある成り立っているのを改めて感じる事ができました。

ドイツでは、10歳から将来のことを考えて選択するのを初めて知って、凄い大きな決断だと思いました。私も今後ふるさについて学びたいなと思いました。地域に貢献していきたいと思います。オンラインも初めてだったので少し緊張しました。

また参加させていただきたいと思います。

2年 稲垣 明日香

今日は、今までと少し違うリモートで沢山の人と交流し、沢山の話を聞くという貴重な体験ができてとても良かったです。

自分が今まで知らなかった活動、仕組みなど知ることができました。国境を越えたところでの日本とは違う教育の仕組みにとっても驚きました。自分の能力に合った学習をすることは、とても良い事だと感じました。自分には少し難しい内容でしたが、今どこで何が起こっているのか知ることができました。

自分たちの活動がもっとたくさんの人達に広がったらいいなと思います。

2年 鈴木 瞳花

今日 KOKÔ 塾のジョイント・フォーラムに参加して沢山学ぶことができました。
世界の進学の方法や OB の方たちのお話など本当にすごく勉強になりました。
十代のころから企業をおこしたりと、本当に感心ばかりでした。

2年 西風 陽向美

今日は色々な事をたくさん知れてよかったです。難しいこともたくさん出てきたけれど
ジョイント・フォーラムに参加できてよかったです。
十代の頃から企業を起こすと聞いてとても驚きました。もし日本にもそのようなのがあれば
少し不安ですが、やってみたいと思いました。
元まちづくり班リーダーの松原さんの発表は凄く、分かりやすかったです。原稿なしでし
かも人前に立って発表できるはすごいことだと思いました。

2年 杉本 京加

去年から、コロナウイルスにより活動ができなくなり 1 年生の時に参加できなかった活
動や、反省する部分などもあったので 2 年生になったらこうしたい！と目標を立てていま
した。今日の発表などを聞いて改めて自分が成長できるように積極的に取り組んでいき
たいと思いました。去年の活動の振り返りや他のグループの活動内容などたくさん知ること
ができ、これからは普通に活動するのではなく、自分には何ができるかをよく考えて活動し
ていきたいです。

2年 伊塚 優汰

今回ジョイント・フォーラムを受けて自分が思ったことは、まず一つに、ドイツと日本の
教育に大きな違いがあることに驚きました。ドイツでは部活がなく、更には試験や進学に関
しても日本と違い、自分に合ってそうでした。これから KOKÔ 塾の活動を独自の視点で頑張
ろうと思います。

2年 山本 若菜

今日は、今年初のジョイント・フォーラムで新しい形で ZOOM を使ってカメラを通してし
ました。各グループのリーダーの発表はとて皆さん堂々としていてすごいと思ったと同
時に私もそのようなことができるようになりたいと思いました。
串本高校の皆さんやドイツの活動など、たくさんのプレゼンテーションはとてもわかり
やすく、見やすくてすごいなと思ったし、尊敬します。
わたしも引き継いでこのような発表をできるようになりたいと思いました。

2年 鈴木 優奈

3年生の先輩方のスピーチを聞いていて、あんなにハキハキとスピーチ出来ていて、すごいなあと思いました。また、ドイツと日本では全然違っていて、高校生が起業しているということにビックリしました。リモートですること、いろんなひとの意見がたくさん聞くことができて為になったと思います。

2年 高倉 綾

今日のジョイント・フォーラムで、先輩達や先生の話聞いて、とてもいい経験ができました。今日の活動を活かしてこれからの活動を積極的に行っていきたいです。

ドイツの教育の仕組みにすごく衝撃を受けて、他の国の教育の仕組みについて知りたいと思いました。

2年 森本 栞風

この活動で改めて KOKO 塾の凄さがよくわかりました。先輩達の話やたくさんの先生の話も聞けて、とてもいい経験をする事ができました。今日の活動を生かしてこれからの活動も積極的に頑張っていきたいです。

ドイツの教育の進み方にもすごく衝撃をうけて、聞いていてとても面白かったです。

2年 紺谷 達也

今日の活動でまた改めて KOKO 塾のすごさ、すばらしさを感じました。

この活動で初めて串本古座高校でも同じように地域と連携して地域を活性化しているのだと知りました。互いに頑張っていけたらと思いました。

KOKO 塾にかかわっていただいている方々がこんなにも全国各地にいらっしゃってとてもありがたく、また粉河高校の活動が全国に知られているんだと思い、うれしく、誇らしく思いました。

2年 山本 琉心

短い時間だったけど、とても内容の濃い話ばかりでたくさんの刺激を受けた。串本古座高校の取り組みやドイツの学生の活動など、私と同じ年の子たちが KOKO 塾に似た活動をしているんだと思うと、私も頑張らないと、という思いが生まれた。

KOKO 塾が 20 年も続いてこられたのは、地域の皆さんや和歌山大学の方たちの協力があったからだ。今回のジョイント・フォーラムを聴いて改めて感じた。

2年 上須 優葵

卒業された三年生の先輩方の一人が KOKO 塾のおかげで原稿がなくてもしっかり発表できるくらいに成長できたのだとおっしゃっていて、自分もそのくらい成長できるだろうかと

いう不安と期待を感じました。新型コロナウイルスの影響で、一年間活動を行えなかったことで失った時間と経験はどうしようもありますが、今年からその経験に負けないものを得られるように頑張りたいと思いました。

ドイツと日本の教育の差について初めて知り、私は自ら話すことが苦手なので、大学入試の制度を知り驚いたと同時に日本の教育を平等でいいものだとも思いました。

感想 潮崎 遥

三年間 KOKÔ 塾に参加して人前で話すのに慣れたかなと思っていたけれど、今日のめいの発表を聞いてまだまだだなと思いました。

でも、やらなかったよりやってよかったと思えたことが私にとって財産になりなした。粉河にきて KOKÔ 塾にはいってリーダーになってたくさんの経験ができました。ありがとうございました。

感想 松原 女依

元々自己肯定感が低い私ですが、KOKÔ 塾のおかげで自分に自信がつき、それによって自己肯定感も少しは上がった気がします。

発表の時も言いましたが、いろいろな活動を通して自分自身の成長を感じられました。しかし、自分自身が変われただけでなく、これからの課題も見つかりました。それは、話題にもあがった『常識にとらわれない、ばかもん』を意識することです。自分で言うのもなんですが、真面目に取り組んできた分、私が行ってきたことに面白みは足りなかったと感じています。それに気づかせてくれた友人との出会いの場にもなった KOKÔ 塾にはやはり感謝しかありません。

これから、教育学部に進みますが、自分からなにか行動に移して、いい意味で目立った人間になりたいと思います。

■ 参加者の感想・ご意見（チャットから）

- ・生徒のおかげで、地域の人たちと交流を広げられました。ありがとう（粉河 Y 先生）
- ・高校生が起業することを先生が支援していることに衝撃を受けました（粉河高校 Y 先生）。
- ・ドイツの学習制度について様々なことを知ることができました。日本にも生徒起業のできる制度や学校があればチャレンジしてみたいとおもいました。（和歌山大学 OB）
- ・日本に比べドイツは、子どもが進路を考える機会が早くから与えられており、経済や社会の情勢につき敏感なのかなという印象です。10 歳で大きな決断をするわけですが、その後気持ちが変わったということもあろうかと思われそうですが、そこは気になるところです。（和歌山大学学生）
- ・53 歳高校生の母親です。マナビィスト講座で 2 年間串本古座高校生の高校生との交流がありました。CGS 部という存在や地域のコーディネーターの存在と特色のある活動をもっと知ってもらいたいと思いました。地元の高校を卒業して子どもは進学します。西岡先生のように高校時代の活動が今は教育現場で活躍されるようになられていること。ただ一方的な授業を受けるというのではなくしっかりと考えて行動できることが大切だと思いました。子どもが小学 6 年生の時にふるさと学習をきっかけに国連大学での発表の機会があり ESD について知ることがありました。地域との関係ではドイツの話がとてもすすんでいるように思いました。
- ・元和歌山大学の卒業生で、KOKO 塾に出会い、学び続けている T です。
生徒さんたちの報告、高雄さんの報告ともに、大きく力強いものを感じます。このような会に参加でき、また、このような学びの場が KOKO 塾によってつくられていることが凄いなと思っています。いつかまた、高校生のみんなが生き活きと活動を創る中に、混ぜてもらえる日を心から楽しみにしております♪（和歌山大学 OB）
- ・本日はお疲れさまです。当初から 19 年関わらせて頂いております和歌山大学教員足立です。あの時の生徒さんが今は先生になって発言されている。感無量です。地元の方、生徒さん、先生方、山口先生、皆様、お疲れさまでした。持続可能な取組みになりましたね。

講師の高雄綾子先生より

ありがとうございました。ドイツよりも日本の学校はずっと生徒と先生の関係が近く、先生の影響がとても大きいと思います。ドイツはそうではなく、親の考えの影響が大きいので、同じ学校に通っていても格差が大きくなりがちです。ましてや商業系、工業系高校からは、這い上がっていくのは困難です。そのような課題を持ったドイツ社会の中で生徒企業がとても注目されています。皆さんの活動はドイツでとても反響があると思います。

第1回 KOKÔ 塾企画運営委員会を受けて

2020.10.31 第2回企画運営委員会 決定

1. 第1回企画運営委員会が出された意見の要約

- 校長の説明……生徒数の減少が和歌山県そしてこの地域でも見込まれること。その中で、粉河高校の特色を明確化することが必要。
 - ・『総合的学習の時間』から「総合的探求の時間」へ。
 - ・「総合的探求の時間」では、KOKÔ 塾の取組を発展させた「KOKÔ 学」を来年度の1年生から創設する。（KOKÔ 塾との関連を生かして、主体的に課題を発見し、解決する力を養う。）
 - ・7限授業の実施や令和4年度からの新学習指導要領の関係から、学校の体制としては、教員の負担を軽減するため KOKÔ 塾をクラブ化する必要がある。
 - 参加者の意見
 - ・KOKÔ 塾とは何かをもう一度考える必要がある。クラブ化することで、今までの KOKÔ 塾の良さを継続できるのか疑問である。
 - ・クラブ化した場合、人数が集まらなくなるのではないかと？
 - ・学校づくりと地域づくりを一体で学ぶ KOKÔ 塾が今こそ必要になっている。
 - ・KOKÔ 塾は教員のボランティアで進めてきたが、今後は今の体制の継続は難しい。
(教員)
 - ・持続可能な KOKÔ 塾の在り方を検討することが必要ではないか。
 - ・KOKÔ 塾は、学校だけでなく地域・和大学・粉河高校と三者で築いてきたので、学校だけで結論を急がず、三者が納得できる話し合いが必要ではないか。
 - ・KOKÔ 塾が一クラブになった場合、大学や地域がこれまで通り連携を継続できるか、それぞれの意向を確認する必要がある。
 - その他
 - ・今年度のオープンカフェは開催中止。
 - ・ジョイントフォーラムは、生徒発表は難しいが、生徒間の接続・継承から実施したい。
 - ・オープンカフェなどの活動基金を山崎邸「創カフェ」に寄付すること。
- 以上、様々な意見が出されたため、一度の説明で終わらず第2回企画運営委員会を開くことを決定した。

2. 検討会のまとめ、原案について

以上の第1回企画委員会の内容を受けて、第2回企画運営委員会への原案作成のため、地域：山口裕市、和歌山大学：村田和子、学校：横出により本日まで3回の検討会を行った。（第2・3回は田中教諭も出席）

1) 上記検討会のまとめ

- ① 粉河高校の諸事情から、KOKÔ 塾を継続するには高校においては「クラブ化」の位置づけはやむを得ないという考えで合意した。
- ② そのうえで、高大地域連携による KOKÔ 塾の良さを残しつつ、「KOKÔ 学」への貢献を含めて新たな発展が可能な方向を探る。

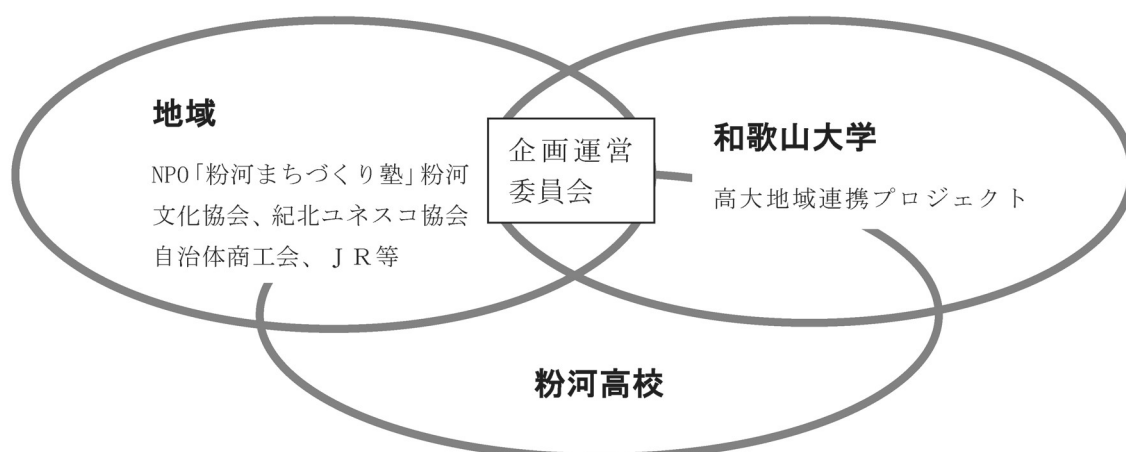
そのうえで、次のように提案したい。

- ・これまで KOKÔ 塾の高大地域連携事業の方針づくりを担ってきた「企画委員会」を「企画運営委員会」とあらため、今まで参加してもらっていた大学・地域との連携を存続、発展させ、全体の窓口的機能を果たせるようにする。
- ・オープンカフェなどのイベントは、先ず全校生徒に呼びかけ、さらに他クラブとの連携を行いながら「実行委員会」を組織して、企画・運営にあたる。
- ・学校に対しては、KOKÔ 塾を担当する正顧問は兼職無しにし、副顧問は複数配置するように働きかける。また4月からの1年生への勧誘については、クラブ紹介以外にもオリエンテーションや KOKÔ 塾はクラブ化しても『KOKÔ 塾部』にはせず、今まで通り『KOKÔ 塾』とし、基本的な理念である「地域に根ざし、地域とともに歩む学校」「本物の学び」「教授も地域の大人も教員も生徒も同じ立場で《学ぶ》こと」「活動は、奉仕活動ではなく、生徒の主体的な学びとすること」、「《学ぶ》ことは、おもしろいこと⇒ 教員は引率じゃない」「なりゆきまかせの客体から、自らの歴史をつづる主体へ」などを大切にする。
- ・これ以外の詳細な事項は、企画運営委員会を通じてその都度決定していくこととする。

2) 「企画運営委員会」の関連図

高校・大学・地域の三者連携の関係を以下の図に表してみた。

この図では、三者の連携をとりまとめ、調整する組織を「企画運営委員会」と表示し、KOKÔ 塾だけでなく「KOKÔ 学」に関連する連携にも関わられるようになっており、地域関係ではさまざまな関係機関・団体との連携を視野に入れるとともに、可能であれば、これまでも KOKÔ 塾のオリエンテーションやジョイントフォーラムなどに出席し連携して取り組んできた紀の川市や JR など連携の視野に入れている。



3) 総合的探求の時間「KOKÔ 学」との連携

- ・従来の「KOKÔ 塾企画委員会申し合わせ」は、継続することとする。
- ・事務局は高校と和歌山大学が共同で処理する。将来的には、独自の事務局体制の確立が必要。
- ・実行委員会は、連携事業の必要に応じて設置する。

3. これからの KOKÔ 塾の可能性についての検討

クラブ化することによってのデメリットは生じるが、毎日の活動が可能となり、今まで以上に十分に時間を使って企画を考え、活動範囲を広げていけるのは事実である。また総合的探求の時間「KOKÔ 学」が生まれることによって、その内容を全校生徒に伝えていけることも今までにない発展となるだろう。また和歌山大学との共同の中で、KOKÔ 塾を単なる課外活動として連携するのではなく、一つの学問的な研究対象の軸として考えてもらい、他校や学校以外の地域の組織に広げることによって、和歌山県全体、引いては全国にもネットワークを広げていくことを目標としたい。具体的には以下にあげる。

- 和歌山大学の人材による公開講座の実施
- 高校生を対象にした「出前講座」……以前、近大生物理工学部との連携で実施していた。
- 地域の大人たちと高校生を対象にした「公開講座」……高校の地域貢献と大人のまなびづくり。
- 「KOKÔ 学」への貢献……大学や地域を高校生の探求的な学びに導入。
- 県内外の高校との交流……KOKÔ 塾の学びを拡げ、深化を図る。
- 県内外における大人と高校生のフィールドワーク……以前は数回実施していた。
- まちづくり・環境・福祉・その他の分野で特色ある取組を調査。
- 大学だけに頼らず、高校の先生方の専門性や地域の企業や NPO 等の取組を生かしたワークショップの可能性もある。
- 最後に、KOKÔ 塾は、すでに「高校だけのもの」ではなく、教職員・生徒・卒業生・保護者・地域(個人・団体)・同窓会・地元小・中学校・和歌山大学など、さまざまな個人・団体が共同で創造してきたものであることをもう一度確認し、一人ひとりが主体的に選択できる柔軟さを持って、全体を貫く理念(願い)が生きるものにしていくことを目標とすること。

KOKÔ 塾企画委員会申し合わせ

(名称)

第1条 本会は、KOKÔ 塾「まなびの郷」企画委員会（以下「委員会」という）と称し、本申し合わせにより委員会について必要な事項を定める。

(目的)

第2条 委員会の趣旨は、和歌山大学と和歌山県立粉河高等学校及び地域が連携して、生徒・学生・地域住民たちに「本物の学び」体験と地域づくりの共同学習を展開する手作りの「まなびの郷」である。また、地域生活文化への関わりを通して高校・大学・地域改革を行うとともに、年齢・職業・分野・地域等を越えた地域活性化のための共同学習＝「地域づくり学習」の場を提供することを目的とする。

(事業)

第3条 委員会は、前条の目的を達成するために次の各号に掲げる事業を行う。

- (1) 高校を「学びの居場所」すなわち地域コミュニティのひとつの核とする事業
- (2) 地域の異世代、異分野の人々が主体的に参画する地域共同学習の場を創る事業
- (3) 双方の教育研究能力を活用して地域連携力を高め住みよい地域づくりに貢献する事業
- (4) 自らの関心や疑問、学びに関する希望を出し合い、方向性を持たせる独自のプログラムづくりを行うため、ワーキング・グループを創る事業
- (5) 各ワーキング・グループ活動の交流を図るために、合同ワークショップを開催する事業
- (6) 各ワーキング・グループ活動内容発表のために、ジョイントフォーラム、シンポジウムを開催する事業
- (7) その他、KOKÔ 塾「学びの郷」の目的を達成するための事業

(審議事項)

第4条 委員会は、次の各号に掲げる事項を審議する。

- (1) 地域づくり学習の企画に関する事項
- (2) ワーキング・グループに関する事項
- (3) 合同ワークショップに関する事項
- (4) ジョイントフォーラム、シンポジウムに関する事項
- (5) その他、KOKÔ 塾「学びの郷」の目的を達成するために必要な事項

(組織)

第5条 委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

- (1) 高校生
- (2) 粉河高等学校教職員
- (3) 地域住民
- (4) 大学生・大学院生
- (5) 和歌山大学教職員
- (6) 行政関係者
- (7) その他

(役員)

第6条 委員会は、高校・大学・地域の代表世話人制をとる。

(会議)

第7条 委員会の議事は、出席者の過半数をもって決し、可否同数のときは、代表世話人の決するところによる。

(委員以外の出席)

第8条 委員会が必要と認めた場合は、委員以外の出席を求め、意見を聴くことができる。

(事務)

第9条 委員会の事務は、粉河高等学校及び和歌山大学紀伊半島価値共創基幹で処理する。

(雑則)

第10条 この申し合わせに定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、委員会が定める。

附則

- 1 この申し合わせは、平成20年6月14日から施行する。
- 2 第9条の事務の細則は、和歌山大学機関名称の変更による。

KOKO塾『まなびの郷』2020年度

Zoom

オンライン開催

高大地域連携ジョイント・フォーラム

持続可能な

学校づくり・地域づくり

KOKO塾は
来年度20年目

参加無料



挨拶、趣旨説明

13:00 ~

第一部

13:15 ~ 14:15

まなびの郷 KOKO塾の取り組み

高校生による発表、地域からの報告

串本古座高校 CGS部の取り組み

※CGS...Community general support

高校生による発表、KOKO塾OBの教諭によるメッセージ

第二部

14:20 ~ 15:20 ※リモートによる講演 (45分)

ドイツの高校生企業活動『持続可能な生徒企業』講演

講師：高雄綾子氏（フェリス学院大学国際交流学部・准教授）

- ・高校生企業活動の概要と、ESD としてのアプローチの理論的背景
- ・いくつかの実践紹介
- ・活動を支える地域のサポーター「マルチプリケーター」
- ・参加者から質疑、全体コメント（10分～15分）。

第三部

15:25 ~ 15:55

KOKO塾に関わってきた地域、先生、OBたちの思い

閉会挨拶

KOKO塾「まなびの郷」とは

高校 「荒れた学校」を再生したい

地域 地域を元気に、活性化したい

大学 「一方的な知の伝授」ではない、地域発展学習の創造を
…願って、めざして、協力して、共に創って、もうすぐ20年
ニューノーマル時代の新たな学校と地域の連携の在り方を探る

主催 和歌山大学紀伊半島価値共創基幹Kii-Plus
和歌山県立粉河高等学校

2021.3.6



Zoomによるオンライン開催です。
メール、またはファックスにて、氏名、メールアドレス等を
記入し申し込んでください。

13:00-16:00

Zoom入室は、15分前から受付

申し込み・問合せ 和歌山大学紀伊半島価値共創基幹Kii-Plus
生涯学習・リカレント教育推進室
〒640-8510 和歌山市栄谷930番地
mail: lifelong@ml.wakayama-u.ac.jp
TEL 073-457-7152 FAX 073-457-7167



▲こちらからも
メールを送信できます。

講演

地域発展学習セミナー

ドイツの高校生企業活動『持続可能な生徒企業』

高雄綾子氏（フェリス学院大学国際交流学部准教授）

東京大学大学院教育学研究科修士課程修了。専門は、環境教育、ドイツの持続可能な開発のための教育。主な著書・論文に、「ドイツにおける環境NPOと地域社会の相互発展構造」（『NPOと社会教育』、東洋館出版社、2007年）、「グローバリゼーション下での地域発展における社会的格差は正への取組とESD実践の関係」（『環境教育』第48号、2012年）、「ドイツ・脱原発への市民の学習：リスク認識から地域再生へ」（『地域学習の創造：地域再生への学びを拓く』、東京大学出版会、2015年）など。

特に地域社会における環境教育を通じた持続可能な地域づくりに関心を持っている。

高雄綾子氏よりコメント

学校は勉強するところ、お金儲けなんてとんでもない！という考えから、少しだけ離れてみませんか？

生徒が中心となって企業活動をしながら、地域社会にとってとても重要な経済の役割を学ぶ学校がドイツにあるのです。どんな活動をしているのか、具体的にご紹介します。

申し込み方法 下記のいずれかの方法で必要事項を入力して申し込んでください。事前申し込みのみ可。当日の申し込みはできません。
メール（上記QRコードからもメールを送れます）またはファックスにて、氏名、メールアドレス等を記入し申し込んでください。

申し込み期限：2021年3月3日（水）
17:00まで 参加無料

申込票

必要事項をご記入の上、FAXにて送信するか、下記内容をメールにてお申し付けください。

氏名（ふりがな）	TEL
E-mail	所属

※このお申し込み情報は本企画開催の目的以外では使用しません。

発行日 2021(令和3)年4月1日

発 行 和歌山大学紀伊半島価値共創基幹 Kii-Plus
〒640-8510 和歌山市栄谷930
TEL 073-457-7166 FAX 073-457-7167
<https://www.wakayama-u.ac.jp/region/>

和歌山県立粉河高等学校
〒649-6595(学校専用) 和歌山県紀の川市粉河4632番地
TEL (0736)73-3411 FAX (0736)73-3412
e-mail postmaster@kokawa-h.wakayama-c.ed.jp

印 刷 社会福祉法人 一麦会
麦の郷印刷
〒649-6338 和歌山市府中1167-1
TEL 073-464-3707 FAX 073-464-3708